

『仏釈集』

——翻刻と解題——

落 合 博 志

要旨 中世の唱導資料の一例として、『仏釈集』（写本一冊）を翻刻し、いささか解説を加える。本書は大日如来以下の諸仏・菩薩・明王・天および祖師の功德・縁起等を説いた文章を、主に法会における仏釈を資料として収集し類聚したものである。備中の金剛福寺旧蔵本で、奥書により親本が高野山にあったことが知られる。伝来や構成の点から真言宗の僧の編纂にかかるかと推定されるが、ただし収載された文章には天台系のものが多いようである。本書は逆修・追善の仏事や本尊の造立供養等の場で、実際に導師によって口演された詞章を多く集めているらしい点、必ずしも豊富でないその資料として多少の意義がある。就中注目されるのは、金沢文庫本『釈門秘鑰』に取められた澄憲作の仏釈と重なるものを数編含んでいることで、安居院の唱導文の伝流・利用に関しても有益な知見を提供すると思われる。

〔翻刻凡例〕

一、改行は底本のままとする。ただし、各篇の標題や本文冒頭が前行に追い込みの形で書かれている場合は、それぞれ独立に行を立てる。

一、改頁箇所を「一〇」のように示す。なお、丁次は原表紙を除いて数える。

一、字体は漢字・カナとも原則的に通行のものを用いる。ただし、一部の略字・異体字は生かしたものもある。

一、いわゆる抄物書きになっている「菩薩・菩提・娑婆・瑠璃」などの文字、またコト・シテ・トテ・トモなどのカナの合字・異体字は、本来の表記に改める。

一、虫損その他難読の文字には□を当てる。

一、漢字の右下に書かれているカナの小字は、原則的に付訓および返読表記の場合はルビとし、その他は本行に右寄せ小字で示す。ただし、文脈や底本の記載形態等により、便宜に従った場合もある。

一、私意により句読点および「」を施す。なお、偶頌などの句切りに空格が置かれている時は底本の形を生かす。

一、各篇の標題の上に、私に123…の通し番号を振る。

一、行取りや抄物書きの文字について底本を改めた場合、見セケチ符号等により消された文字、虫損の文字、疑問のある表記、難読の文字、空格等につき、適宜下欄に注記する。ただし頻出する「菩薩・菩提」は注記を省略する。

*底本の誤字・脱字や疑問のある表記については、一々(ママ)と注記する煩を避けて下欄で指摘するようにしたが、何の誤りか分らないものもあり、必ずしも十分ではない。なお正格ではなくとも、慣用的な用字の場合は注を省いたことも多い。また送仮名や返点の誤りについては原則的に触れないこととしたので、その点底本の補正が不徹底であることをお断りしておく。経文の引用の類はなるべく原典と対照したが、全ての異同は注さず、文意に関わるようなものに限っている。なお底本には字形の不整な例が少なくないが、特に甚しいものを指摘するに止めた。

金剛福寺蔵

仏
積
集

(覆い表紙)

中ジンセン

□音

今ハ

隆誉之

空政(花押)

仏
積
集

(原表紙)

□、玄か。この署名、抹消
□音以下の署名、別筆

仏釈集

大日廿八日 亦大日釈 又大日釈 三十七尊事 薬師

亦薬師 又薬師 亦薬師仏尺 日光廿二日 月光大勢至廿三日

阿弥陀 亦阿陀 亦弥陀尺 亦弥陀別願事 又弥陀事

又善光寺弥陀 釈迦 亦釈迦 亦釈迦尺 舍利事

弥勒五日 亦弥勒 文殊廿五日 亦文殊十四日 普賢

亦普賢 観音 亦観音 亦観音尺 六観音并千手尺

十一面同 如意輪同 亦如意輪 勢至 亦勢至

亦勢至尺 虚空蔵十三日 亦虚空蔵 地藏廿四日 亦地藏

亦地藏 愛染王一日 不動尊廿八日 明王 大威徳

毘沙門 亦毘沙門 亦毘沙門

弘法大師伝記 伝教伝記 慈恵大師

慈覚大師伝記 天台伝記 聖徳太子

亦聖徳太子 善導伝記

下の阿の下、弥脱

この丁、以下余白

1 大日 廿八日

大日如来者、非青黄赤白色、無長短方円之形。常寂光

土之宮^{ミヤ}出、靜^{シテ}依正不二也。仍常樂我淨被成、龐細寬狹之

形不見。非說法斷疑之身、不說權實半滿之教^{マコト}、非隨類

化現之形、不現十法界機緣前^{ニモ}。常住不思議理仏、唯不

變真如正躰也。故平等法性之日輪ノ上ニ无第一之身生^モ、无

去无来之月光中ニ物莊嚴々々ノ躰映徹セリ。密教中ハ成三密

頓速之教主^ト、顯教意ハ非說法斷疑之化主。爰ニ大日遍照

之如来、无所不至之理性、廿八日夜為利有情之將軍^ヲ云。

2 大日如来尺 伊勢國住人兵部 大日供養尺導師円寂

夫大日如来者、秘密之教主、両部之中台也。九会四重ノ聖衆、

併无不^レ大日之所現。梵音ニハ名摩訶毘盧遮那、翻シテ名最高^ニ 2オ

広眼相如来。亦名一切諸仏菩薩清淨広博藏如来。大日經中ニハ

名為法界俱舍^ト。名大日^ニ者、除暗遍明之義也。以世間日光少

分相似^{スルヲ}、取為譬名^ニ也。日出照世界、一切草木叢林各得

生長^{スル}。世間ノ衆務、得日皆成弁ス。如来日光亦復如是。一切有

情ノ善根生長^シ、出世ノ事業成就^{セシム}。六道四生之有情生^{シテ}

善根芽莖^ヲ、成覺樹之花菓^ヲ。皆是依如来日光^ニ。声聞

十の下、方を消す

緣覚一切菩提ノ上求下化ノ事業成弁シ、併依大日遍照光

菩提は菩薩の誤り

用。故名大日也。又譬者、黒雲覆天、日光無現、日輪正赫

更ニ無壞誠事。惑障隱法身、無滅法身理。縦ハ

事の下、一字分空白

除雲見日光、断煩惱如顯法身。故名大日如来也。何況

胎金阿部、同以此尊為中台。一仏トモニ、所像小異。雖似異、

實是一也。胎藏八業者、衆生ノ身中ノ八葉ノ肉団也。一念」_{2ウ}

淨心之内ニ、具万行至果徳、顯八葉蓮台、發心修行菩提涅槃、悉

涅槃、底本支

具足八葉也安然。当知、大日如来ノ大悲胎藏之中ニ養育

法界有情、法界有情心胎之中ニ開發大日如来大悲胎

藏也。生仏理等、始終一軌也。胎藏大日、以此雖可思也。

始、如に加筆して訂す
雖から線を引きフシンと傍記

金剛界者、大日如来五智ノ金剛之中ニ加持法界有情、法界

有情心中發生大日如来五智金剛。名之金剛界也。案

瑜祇經心、金剛界ノ遍照如来、以五智所成、四種法身、於

本有金剛界自在天三摩耶、自覺本初大菩提心普

耶の下、一字分空白

賢滿住、不壞金剛光明心殿中、流出自性所成卅七尊、

自受法樂シテ説如来内証之境界。十地菩薩猶不能見聞、

況ニ乘凡夫哉。自性可生弁各以求誓加持力、住金剛月

輪之中、持本三摩地標幟、皆是微細法身秘密心地也。」_{3オ}

幟は幟の誤り

一々遍滿^{シテ}虚空法界、常於三世利益有情、無時而暫止。以此衆會^ヲ撰^シ盡^ス虚空法界聖衆、於此心殿^ニ撰^シ盡^ス無

迦塵刹之仏会。当知、卅七尊並是諸仏現^ニ証^ス菩提、内

眷属毘盧遮那ノ牙鉢也。故知、大日一仏ハ撰^シ虚空聖衆、

納塵数菩提。故造立此一尊^ヲ功德、等^ト事法界諸仏。故

大法主、滅罪生善自利々他、興隆仏法利益衆生、衆徳円

満衆願満足給歟。首戴^ニ三冬雪^ヲ心蓮^ノ月無傾^{コト}、眉垂^ト

八字霜^ヲ阿字ノ光鎮^ニ明^ム。香煙無絶^{コト}、遠待慈代^ノ下生^ヲ、覺

花長芳^{シテ}遥期^ニ弥陀^ノ蓮台^ヲ。伽藍安穩興隆仏法、天衆地

祇隨遂守護、乃至法界利益周遍^云。

可出造像功德經^文也^云。

3 大日釈第 五十

夫大日如来者、

法身ト申事也。四智ノ功德皆具^セ之。秘密宗^ニハ、四智之外^ニ法界[』] 3ウ

鉢性智ヲ立。此智内^ニ二字アリ。即阿ハ胎藏界ノ教主、五智徳ヲ具セリ。

即從因^ニ向果^ニ義也。十三大会ノ能生ノ智母也。依法花^ニ者、

迹門ノ意也。具始^{シテ}有^ニ似^トモ、証^ス无始无終之理^ヲ。五百余尊ノ

曼陀羅、一切衆生ノ心性ニ備^{タリ}、或ハ開或ハ知ハ、速^ニ成仏ス。故^ニ五官

菩提は菩薩の誤り

云はモの誤りか

代は氏の誤り

遂は逐の誤り
云の下、約七字分空白

標題・本文、前行に追い込み

タリの下、ト脱か

大王ヲ始トシテ、今日ノ幽靈モ諸罪人ニ至マテ、今日所奉尺「大日如来ノ
功德法門ヲ聞知テ、即身成仏無疑。 次「字者、金剛

界教主大日如来ノ智拳ノ一印ヨリ、九会ノ聖衆五部ノ諸尊、七

百余尊ノ仏菩薩ヲ流出給也。若千ノ諸尊一切衆生ノ心中ノ妙法

蓮台ニ住シ給ト、或ハ聞或ハ知ハ、此身即仏也。故ニ亦、五官大王ノ法施ニ

大功アル也。 經文説云、

「無量俱低劫 所作衆罪障 見此曼荼羅 一時皆消滅」。

4 卅七尊事

五仏 四波羅密 十六菩薩 四摂 八養也。 』 4オ

五仏者、大日尊居遍一切処、法界宮中法身如来靈仏也。

四波羅密者、金剛密羯摩等四波羅密菩薩、從ニ四仏ニ慈悲出

現説法玉フ菩薩也。 十六大菩薩者、薩王愛喜ハ、東方金剛

莊嚴世界、不動 如来ノ四親母近菩薩ナリ。 宝光幢映ハ、南方

宝光明功德世界、宝生如来四親近菩薩ナリ。 法利因悟ハ、西方

蓮花宝藏世界、阿弥陀如来ノ四親近菩提ナリ。 業護互拳ハ、

北方反化輪作用世界 不空成就如来四親近菩薩ナリ。

四摂者 鈞 索 鏢 鈴。 鬘イ本 髻イ本。

八供養嬉鬘歌舞ハ、此四菩薩是四仏ノ慈悲、遍シテ法界

疑の下、一字分空白

千は千の誤り

云の下、空白

低は低の誤り

本文、前行に追い込み

密は宝の誤り。その下、法脱か

動の下、一字分空白
母、不審

悟は語の誤り

菩提は菩薩の誤り

互は牙の誤り
界の下、一字分空白

鈞は鈞の誤り

鬘以下、もと次行の注記か

説法スルナリ。香花燈塗、此四菩薩ハ是四仏^種稔智、遍法界説

法利生スルナリ。三十七尊付金界、鏡智御房住文略頌云、

「五仏四親近四摂八供養」。頌意云、五仏各有^{4ウ}

四親近菩薩、加仏於菩薩合論之、五々二十五尊[□]。更四摂八

供ノ菩薩、成三十七尊也。大日ノ四親近者、一東金剛波羅密

菩薩、二南宝々々々々、三西法々々々々、四北羯摩々々々々、

是名四波羅密菩薩。東阿閼四親近者、一金剛薩埵

菩薩、二金剛王菩薩、三金剛愛菩薩^{此愛集明王}、四金剛喜

菩薩、是名薩王愛喜ノ四菩薩。南宝生四親近者、一金剛宝

菩薩、二金剛光菩薩、三金剛幢菩薩、四金剛咲菩薩、是名宝

光幢咲四菩薩。西阿弥陀四親近者、一金剛法菩薩、二

金剛利菩薩^{文殊也}、三金剛因菩薩、四金剛語菩薩、是名法利

因語四菩薩。北不空成就四親近者、一金剛業菩薩、二金剛

護菩薩、三金剛互菩薩、四金剛拳菩薩、是名業護互拳

四菩薩。四摂者、一金剛鈎菩薩、二金剛索菩薩、三金剛鎖菩薩、

四金剛鈴菩薩也。八養者、内四外四ノ供養也。内四者、

一金剛嬉菩薩、二金剛鬘菩薩、三金剛歌菩薩、四金剛舞

菩薩。外四者、一金剛香菩薩、二金剛花菩薩、三金剛燈菩薩、

住は注の誤りか

□、ナカ

光の上、宝を消す

互は牙の誤り

鈎は鈎の誤り

金の上、摂者を消す

四金剛塗香菩薩也。

私云、為大日心所為余州六尊、共住一心蓮台。此皆出經。

5 薬師

薬師如来者、東土瑠璃浄土教主利忍。七仏薬師者、

第一瑠璃薬師左ノ手掌ニ持瑠璃。右手ヲハ左ニ向テ捧タリ。土ハ瑠璃世界也。

第二宝同薬師月殿手四也。二手ハ合掌セリ。二手ハ、左肩上ニ持蓮花、右肩上持尺杖。

第三月薬師、印相ハ如第一薬師。

第四光薬師四手也。二手ハ合掌。一手ハ、左掌ニ肩上持瑠璃。右手ニハ肩上持箭。土ヲハ名額世界。

第五無憂宝勝薬師四大願。印相ハ、右手ノ掌ニ持瑠璃。左

第六法海香音薬師四大願。印相ハ、左手ニハ乳上持蓮花。

第七法海勝惠薬師四大願。八手也。二手ハ当齊、弥陀ノ

上持二日輪。一手ハ右肩上ニ持月輪。一手ハ左臂程ニ捧宝塔。

一手ハ右臂ノ程ニ持劔。土ヲハ名善住世界。土穢惡世界衆生也。

薬卜者、道種莫疑之薬也。愈二十界恒沙立病。師卜者、船

師大船師、渡生死海大師也。況三或病ハ、経塵劫

不レ書。一心三觀ノ薬ヲ服ハ、立処ニ差ヌ。生死患ハ送トモ劫教ニ長命ニ

依伊王智方服ル前ニ已ス。或染不浄ノ身ナレトモ、伊王ノ願力ニハ内外映

徹シテ、成清浄瑠璃人。分段肉段ノ人トトモ、蒙ラハ善逝智方ニ成

法性身姿。爰此界衆生ハ、煩惱生死ノ根元厚シテ、三世十方ノ

小字注記の瑠璃、底本玉玉。以下三例も同じ

□、環の異体か
第二の仏名、不審

右手ニハの下、合掌ニ手を消す

有は憂の誤り

□□、幢（旁は明瞭）世か

齊は臍の誤りか

以下二行、当為小字注記

船の上・劫の下、共に師を消す
或は惑の誤り。以下同

書（異体）は尽の誤り

已、亡とも読める

瑠璃、底本玉玉

厚、白の下に子に作る

仏_ニ被_レ厭。衆土ノ教主如来ハ、他界マテモ引導_シ五濁惡世衆

生御ス。就中一經其耳ノ誓願、勝諸仏。衆病悉除説、誰

人不除万病。此其薬師如来功德也。已上七仏薬師印相。』6オ

又七仏薬師者、第一仏ハ諸天竺ヨリ東方ヲ去テ、過四恒河沙之

仏土_ニ有世界、名無勝。仏号善名称吉祥如来。不退ノ菩薩_ニ所

圍繞、安住_シ七宝勝妙莊嚴_ノ師子之座、現在ニ説法ス。此如来本ト

行菩薩道_ノ時、発八大願。一々大願、皆衆生拔苦与樂ノ事也。

第二ノ如来ハ、亦過五恒河沙仏土有世界、名曰妙法。仏号

宝月智嚴光音自在如来。此如来又発八大願。々ノ大旨

不過上。第三如来、過六恒河沙仏土有世界、名曰円満

香積。仏号金色宝光妙行成就如来。発四大願。第

四如来、過七恒河沙仏土有世界、名無憂。仏号最勝吉

祥如来。此如来又発四大願。第五如来ハ、過八恒河沙仏

土有宝幢世界、仏号法海雷音如来。亦発四大願。

第六如来ハ、過九恒河沙仏土有善住宝海世界、仏号』6ウ

宝海勝惠遊戲神通如来。是亦発四大願。第七仏、

從此東方過十恒河沙仏土、可用上大応不由也。

界の下、等を消す

法は宝の誤り

宝は法の誤り
法の下、界を消す

宝は法の誤り

6 又薬師

薬師如来者、此如来之像法転時之利益ハ、当此時^一。何

況、聊智者物語シ給候シテ承候シカハ、阿弥陀如来因位

之時、六十ノ大願起給ヘリ。夫ヲ薬師如来因位之時、請^{コイ}申給^ヒ

仏^ニケル様、「我末代悪世ニ利益仕^シ。其^レ君起^{キミヲ}シ給フトコロノ大願ヲ、

少々ユツリ給ヘ」ト申^ノ、其時阿弥陀如来宣様、「我所

起大願、一切衆生現世当生悉地円満セント願ナリ。而実

悪世ノ衆生テンコクニシテ、心不実也。為^ニ満^シ二世^ヲ弘^ルレ経^ヲ、破

レ石鉄研ヨリモ堅シ。サラハ君十二大願承取、一切衆生現

世ノ望満給エ。我四十八願丸マロケテ、一切衆生ノ後世ヲタ』^一オ

スケ、仏ニナサン。現世ヲ祈ム輩ヲハ、君ニユツリ奉ル。後生ヲ頼ム類ヲハ、

我利益シ、約束シテイ給ケル仏ナレバ、ケニモサ候ナリ。薬師

経ニハ「亦如西方極樂世界□莊嚴」ト説テ、事ノハニカケテ

極樂世界ノ事ヲ言^ノカケルヤ、マコトニサモト覚候也。南无

阿弥陀如来ト更ニ後世ヲ祈人ニハ、五逆十惡ノ人ヲモ西方浄土

迎給フ阿弥陀如来マテ思喰所有ルハ、何^{イカテ}彼仏ノ十二願ヲ

受ケタマキテ空クシテハ、ワカマウゴトハ思食ソ。何況ヤ、一經其

耳衆病悉除ノ願ノ事ヲボツカナク思食ハ、何^ニ故^ニ人ノヒハ

ウラモ不還見、薬リツボヲ捧テ世ニハ出現給シゾ。サレハ、トテ

請と申の間、左側に合符あり

□、功德の抄物書きか
莊嚴、底本サム
ハの下、方を消す

モカウテモ仏力難思御ス相ハナケウツテ、施主ノ望滿テ御也。又史記ト申文ニ申様ハ、古ヘ震旦国ニ千越ノ

マカリテアリツルヲ、析スレトモカナイ候□サリケルニ、『ウ

國王智臣ヲ召テ此事ヲ問給ニ、臣カ而シテ云ク、龍形ヲカイテ

エモイハヌマツリラスルニ、忽ニ山河一トナルホトノ雨マツリノ

日ノ夕方降テ、還テ天下大洪水シテアヤウカリケリ。

況薬師如来之形像木クニ造テ、除病患^ト祈シニ、龍

王ノ威勢ニ劣ラシヤ。加之、世間耆婆鵠ハ以薬治病。我

身ハ不病。此仏ハ、身即薬也。非治^{スルノミニ}人病^{ノヲ}。薬即師也。

持業尺也。故彼仏形頭奉テ拜者、无其注^シ云事ハ

不可有。耆婆集^テ諸薬^ヲウツクシケナル小兒ヲ造ニ、

見者皆除病、聞者氣力安楽ナリキ。何況、薬

師如来ノ見鉢^ニ聞者^{モノハ}名、四百四病固^{コトクニシテ}、風前塵、弥陀

薬師阿ノ仏現世後世ノ方カキリシ給シカハ、始タル衆生ノ

相ヲ時利益ノ手始メシ。此亦一往ノ分於二人^ニ究竟而ニ^ニ行ケハ』^{8オ}

互ニ鉢ヲ頭カ如シシ。阿弥陀如来ニモ後世利益ニ預ト申セハ、姓

者花報ニ先現世ノ利益厚カルヘシ。薬師如来ノ現世ヲ

導給ム程ノ者ヲハ、後世ヲモヨモ手ハハナチ給ハシ。初從此仏

也の下、一字分空白且、字形且

□、ハカ

シテ(合字)、メとも読めるこの下、脱文あるか

鵠の上、鵬脱か

二、テを訂す

固は或いは同の誤りか

究竟、底本九九

ト申セハ、小字三行に書く

菩薩結縁ム所以ニ破^テ戒品可^テ隨惡趣者ナリトモ、聞^{テハ}

此仏御名、還可^レ生清淨之寶刹。「衆病悉除」ノ文ニ、事理

二尺可作。理尺寧不此心哉。何況、特設事ウルハシカラム

人、弥^ヨ奉^レ仰此尊「アナトウト、思ハムニ、四十二品ノ無明ノ

病モ立所除^テ、一生妙覺ノ証トモナラム。思ハ^ン趣^ニ登^ル三十地^ニ義

ヲモ成セヨカシ。カ、レハ、仏モ々ヲ造^玉フ事候イキ。祇蘭精舎ニ

シテ、尺迦与五百羅漢シテ造薬師仏給。我国ニハ天

台ノ峯ニ、伝教大師聖靈ノ刻薬師像^ヲ給ヘリ。尤我等

追其古跡、可造此尊^一歟。東方淨刹ヲ設ケハ、西方ニ詣^トモ可^レ」^{8ウ}

レ依^レ薬師力^ニ也。

7 又薬師

次薬師如来別功德奉尺者、夫薬師如来者、從此東

方十恒河沙仏土過、淨瑠璃世界ト申淨土ノ教主ニテ御如

来也。雖然、任運自然之徳不思議ナルカ故、娑婆

世界ノ衆生ヲモ利益給^ヲ仏ナリ。見本願薬師經文^一候、此

如来本行菩薩道時、發十二大願、像法転時衆生ヲ利

益^シ給。中第一願、「令一切有情如我无異」ト誓。一切有情

ヲシテ皆以卅二相八十随好莊嚴其身、如我^一无異^ニ

此の下、道を消す

標題、前行に追い込み

瑠璃、底本玉玉

誓願シ御セハ、法界ノ衆生ハ皆悉此如来利生方便ニアツ

カツテ、可成仏云事聞候。又第十二願ニハ、「隨心所翫皆令満

足」ト結シテ、行者一切心願、皆悉可令満足「誓給テ候。一ニハ仏果

菩提願ハ衆生ヲモ速令成仏、願「現世榮花 衆生、官位寿」^{9オ}

息災招福ノ望、何事可令満足云事分明ニ候。就中御為

大法主者、第七ノ願ノ大功徳被思食候ラム。其故、大法主

所榮花氣ノ御身ニテ御シ候。而第七願ニ説候様ハ、「我之名

号一經其耳、衆病悉除身心安樂」ト申、薬師如来

名号一耳触ハ、衆病悉除身心安樂ナラムト誓給候。

実ニモ生者必滅理、生老病死ノ苦ヲ、欲遁難レ遁、以免

難免ニ候。中ニモ状年之質ニ病患受ナム程、今生ノ歎キ何事

カ候。窮ニ瑜伽三密之流法ニ験シ貴キ行者モ、学天台円宗

之法碩「徳目出キ学匠ナレトモ、身ニ病付ヌレハ行法ヲモ退

所作ヲモヲコタリヌレハ、今世後世ノ祈願モ空クナルヤウニ学

候ヘキニモ、此薬師如来名号ヲタニモ唱ヘ御サハ、我モ人モ衆ノ病ヲ

平愈シテ、日別ノ所作顯密ノ行法モ不退転、今世後世ノ」^{9ウ}

祈願ヲモセム様、御為像徒「大件事何事可レ候。然則

大法主モ深ク信此理、預衆病悉除利益、為行住坐

又、傍記補入

息の上、命脱カ

状は杜の誤り
歎の上、難を消す

学は覺の誤りか

愈、口偏あり

像は僧の誤り

臥起居輕利臨終正念、為毎日不退之作善、

薬師如来形像一百牀奉摺写供養、所師除病延

命之勝利御也。

8 薬師仏尺

夫薬師如来者、昔桂羅山青龍陀仏ノ御弟子、名ヲハ

法薬菩薩ト申キ。発十二大願。十方无边ノ国土ノ一切衆生ヲ

利益シ給フ如来也。十二ノ大願皆尺セムコト雖叶、委ハ経文ニ譲ラン。

但第七ノ願ニ、現世後世ノ所求悉地ハ、皆以籠仏也。然レハ

第七ノ願許リ可奉尺ニ仏也。経文云、第七大願ニ、「我来世

得菩提時、若諸有情衆病逼切、无救无皈无医无

薬、无親无家貧窮多苦、我之名号一經其耳、衆」10オ

病悉除身心安楽、家属資具悉皆豊足、乃至

証得无上菩提」文。文意ハ、若シ諸ノ有情衆ノ病ニ逼サメラレテ、

无救人^ク无皈^{スル}人、无薬師^モ无家^テ、貧窮ニシテ苦多

カラムニモ、薬師仏ノ名号ヲ一ヒ經其、諸病皆悉除カレテ、

身心安楽ニシテ家属資具豊ニシテ、乃至証得無^{セム}

上菩提ノ願ヒ給マラ仏也。是ハ即、昔シ薬師如来ノ因位之時ニ、自

然極リタル貧女ニテ、无父母類身^モ可助人モ更ニ無ケルニ、重病ヲ

師は仰の誤りか

標題、前行に追い込み

雖は難の誤りか

仏は或いは候の誤りか

同右

サはセの誤りか

其の下、耳脱か

受テ曠野ニ被送捨給タリケルニ、我極テ无術御坐シテ、其時ノ事不淺誓願ヒ給タル仏也。唯重病トモ、口ニ一度モ薬師

仏ノ名号ヲ唱エ耳ニモ経レハ、其衆ノ病皆悉クト除^{トク}誓給事、

不思議御事也。衆病者万ノ病ニテ候ソカシ。其上ニ又転貧

窮無福果報、令得富貴自在報。転^ハ短命怖畏』10ウ

与長寿^ニ安楽^ニトヲ^ト給^ト破戒無懺人^トモ薬師^ト号ヲ信セハ、令

成持戒清浄者。『乃至証得無上菩提』ト云、終ニハ成^シ仏^ニ給候也。

9 薬師仏尺

薬師経ニ所説曼殊室利者、文殊也。

大聖文殊ハ、是三世ノ諸仏ノ智母、尺尊ニワ九代ノ祖師、法花

経ニハ八万大士ノ上首トシテ、六瑞ヲ現シ給ニハ、甫処ト御ス弥勒ノ問ヲ

答ニハ、「尺尊モカクヒテ不説給シ法花ヲ被説^レ給ヘキ相」トコソハ答

給シカ。、ル无心元事候ヲ、文殊師利菩薩ノ「何ノ仏ノ名号カ勝給タル」ト

奉問^レ給シカバ、尺迦牟尼如来「汝今極善思惟、当

為汝説」トノ給シヲ、文殊師利ヲ首トシテ、楽音樹^下ニ候イ

ケム人天大会、イカハカリ十方ノ仏中ニハ、何方ニカ有ムトヲホシケムニ、

尺迦如来ノ「東方此」ト説給ケムニ、東方ト云事聞ヌ。東方

ニハ善徳仏ノ事ニヤ有□、或ハ阿閼仏ノ事ニヤ有ムト思ヒ候ヒケムニ、』11オ

耳、難説

不の上、給を消す
万ノ、傍記補入

ニはコの誤り
□、名か

本文、前行に追い込み

、の上、カ脱か

尺の下、尊を消す

此の上、去脱か

上ノヤ有、裏打紙に補筆
□、ムか

葉師如来トコソハ説給シカ。然ニ大聖文殊聞此事^ヲ給テ、不至

疑^ヲ。經教常ノ有^ル世習、如来ノ説教ナレトモ菩薩聖衆ノ致疑^事ハ

常ノ事ニ候ニ、文殊イミシトヲホシケルコソ候又レ不至疑^ヲ給^ハ。況ヤ

尺迦如来ハ、一切衆生ノ父也母也トソ説給タル。子ノ為ニヲロカナル

父母ガ可^ヤレ候。我子ノ一切衆生ノ為ニ「我之名号一經其耳、衆病

悉除身心安樂」ト説給タル、サリトモヨモ虚言ハシ給ハシ。須

達長者、祇園精舎ノ内ニ療病院ト申処ヲ立給タリ。其

精舎ニ、銅鈴ヲカケタリ。其声ヲ聞者ハ、病ヲ除トコソ申^ルタレ。

今此三界皆是我復、其中衆生悉是。究竟如虚空、広

大无。

10 日光

『 11ウ

11 弥陀尺

夫阿弥陀如来者、昔ハ散提嵐国主^ト無上念王、今ハ

西方極樂教主无量寿仏^ト申ス。青秦国ノ王子也。父ヲハ名月

上転輪聖王^ト。母ヲハ号^ス殊勝妙顔婦人^ト。太子ヲハ名明月太子^ト。

12 阿弥陀

夫阿弥陀仏ノ外用ノ功德者、発此仏身量者、六

説給シ、裏打紙に補筆

以下、引用としては不完全。賞書か

无の下、空白

この行、空白

本文、前行に追い込み
□、シカ

本文、前行に追い込み

十萬億那由他恒河沙由旬身量也。眉間白毫遼

右一宛軛事、如重五須弥。円光周百億大千界。御眼

如四大海。凡有八萬四千相好。一々相又有八萬四千好。一々好

有八萬四千光明。惣七百五十俱低六百萬光明、此放

光明照十方。其三取テ、「光明遍照十方世界、念仏衆生

撰取不捨」云、阿弥陀如来无縁光明、照十方世界給。

何不照余行之人、□念仏行者照之給哉。尤不審之

处、善道和尚尺之云、「弥陀身色如山王、相好光明十」¹²オ

方、唯有念仏蒙光照、当知本願最為強」。文意、阿弥

陀如来光明普雖照十方世界、唯照念仏者給事、法

藏比丘本願ニコタエタルナリト尺給ナリ。本願ハイカナリケル

ソト申ニ、五劫思惟之間、余万行万善皆撰捨テ取専称

名号一行ニ為本願、「濁世末代衆生中、唱我名号」ノミ

撰取シテ不捨」誓。但何様者念名号ニ可預来迎申スニ、

和尚云、「仏願力、五逆之与十惡謗法闍提、廻心皆往」ム。

意ハ、本誓悲願染重御之故、五逆モ十惡モ謗法モ闍提モ

廻心テ唱本願名号、皆悉往生スト尺ヘリ。何況非五逆謗

法人、於称名号者、預来迎事者決定無疑事也。

低は低の誤り

□、只か

十の上、照脱か

世中人思習カシテ候事、阿弥陀仏後世利益ハカリニテ

現世利生不御「ヤウニ思テ候、キワメタル僻事候。仏ハ皆、現」12ウ

当二世之利益御候也。サレハ觀經説候様、「称礼シテ念阿弥

陀仏、願往生彼国者、彼国ヨリ即遣无数化仏无数

化觀音勢至菩薩、護念フ。行者後与前二十五菩薩百重

千重困遶行者无間。行住坐臥一切ノ時処ニ、若ハ昼若ハ

夜、常不離行者」。文ノ意ハ、阿弥陀仏若称若礼若念

タテマツリテ極樂ヲ願者ヲハ、自極樂ニ无数化仏无数化

觀音勢至菩薩ヲツカワシテ、百重千重困遶行者、行住

坐臥一切時所、夜昼不離給申意也。サレハ念仏行者

可思食ニ之様者、我ヲ夜昼無數化仏菩薩百重千重

困遶守給ワム者ヲ、サウニハ何ナル惡魔波旬モ不可近我、

何ル王難横災モ不可惱我、可思召事也。阿弥陀仏ノ二世

利益

13 阿弥陀

次別奉尺弥陀如来者、從娑婆世界」13オ

西方過十万億仏土有一浄土、名極樂世界。仏坐、奉名弥

陀如来。十方世界ニ仏多在トモ、殊此ノ土衆生ヲ救給如来也。其

以下、脱文か

標題・本文、前行に追い込み

故ハ、妙樂大師、法花經ノ「即往安樂世界」ノ文ヲ尺給ニ、「教説多故、由物機故、是撰生故、令專住故、宿縁厚故」□云ヘリ。文ノ心ハ、衆生宿縁隨聞。或「諸教所讚多在弥陀、故以西方而為一唯」云。或「末法万年余経失滅、弥陀一教利物偏増」云。然則末法万年ニモ、衆生我人、偏可奉仰弥陀如来者也。一念一称悉蒙利益、四重五逆併引撰給処也。

14 阿弥陀尺

上西門院
御辨家依人詠注意

欲讚歎仏功德、惣有因果二門。因功德有初発菩提心

為初、十地究竟為給。初発心功德者、菩薩於凡夫地「初

发菩提心」之時、昇於廿五有「超過」九十六道。纔「尤発」^{13ウ}

此心時、為一切天龍鬼神之敬礼、為十方諸仏菩薩之儀

護念。菩提心之力、能消滅重々十惡、能出世一切善根。故

花嚴経説云、「菩薩於生死、言初发心時、一向求菩提、堅固

不可動」。彼一念功德、深広ニシテ无涯際。如来分別説、窮劫不

能尽。彼文委可尺之。菩薩ノ发心ハ譬大他。发心ヨリ已来、无

量善根由之生長。譬如大地生長^{スルカ}一切草木^ツ。生人天

善根、如小草。生三蔵菩薩善根、如上草。生通教菩薩善

根、如小樹。生別教菩薩善根、如大樹。生円教菩薩善根、

住は注の誤り
□、トか

唯は准の誤り
失は悉の誤り

葬、上を宛に作る

有は者の誤りか

給は終の誤り

言・一・堅に鉤点あり

他は地の誤り

十字目の善は善の誤り

自地中「如出金銀」。故一切善根、自發菩提心大地「出生也。

就此發心、有薄地初心、有真位發心。薄地初心者、理

即凡夫發心也。位在名字觀行等位。真位發心

者、在菩薩無生法忍、屬初地初住之位。大經云、「發心畢」^{14オ}

竟「不別」。

大師引此文云真位發心尺給へり。若至真位發心、以普

賢色身三昧之力能現十界色像、応周遍法界利益

一切衆生也。花嚴經譬文云、「譬龍王横遍四域豎巨

六天一時降雨、又天帝尺能為九十二那由他采女一時

現身、各々与彼采女娛樂^{スルカ}、又如明鏡自然浮^ル

衆像、又如滿月影現「万水」。撰乘論云、「如竹破初節

余節即能破、得初地真智余地悉当成」ム。大經云、「如

是一心難真發」。乞仏果相望王之也。如是凡夫地至

真位發心、菩薩發種種立種々行。願者誓約衆生

也。行者為滿願立願也。文殊願普賢行、蓋シ

是此類也。阿弥陀如来、或為法藏沙門、於世自在」^{14ウ}

王如来所立四十八願。或為无諍念轉輪聖王、立廿四願。

由願「由願聚云任誓度生。如此惣名因功德也。次果

名の下、号を消す

別の下、空白

遍、傍記補入

種種の下、願脱か

下の由願、衍か

地功德者、因位万行円満所化結縁成就、等覺一転テ

入于妙覺之時、無明雲悉尽法性虛永淨、大覺月

円満智恵光遍照也。何_モ有三身成道不同。実修

実証成道、非所化所見非国土所持。只理智究竟、

居寂光宮也。无能无所、離力_ニ無身_ニ離土_ニ無身_ニ。十地

等覺_モ不知之、況凡夫又二乘之類乎。大師尺、「妙覺極

智、所照如々法界之理」等云。无賢觀云、「名毘盧遮那遍

一切処」等_云。次他受用成道者、十地行滿往色究竟

天於摩醯首羅智所成之。事中乞集一切菩薩衆会

唱成道。或於諸仏淨妙国土事示此成道。或於穢土」_{15才}

成道之時、又為頓機_ニ示之。故大乘論云、「或在色界淨

居天上、或西方等処々不定」。「或在色界」者、色究竟

成道_ヲ云也。「或西方等」者、於諸仏淨土示此儀式之也。

於穢土示之者、釈尊於寂滅道場_ニ初成給正覺

之時、為頓機菩薩_ニ唱此成道_ニ給也。具如花嚴説。故

梵網經説云、「我今盧舍那、方坐蓮花台、周匝千花上、

復現千尺迦、一花百億國、一國一尺迦、各坐菩提樹、一時

成正覺」_云。若論少機感見者、彼百億之尺迦之中、其

无は普の誤り

之は云の誤りか

花の上、現を消す

一菩提樹下敷吉祥草、受牧牛之乳糜、降六天魔

王。无師「自然唱覺是也。无葉上千仏、又不見千億

尺迦。故台上舍那成道者、是為大機」所唱、他受用之

儀式也。

— 15ウ

次応身成道者、一大成道者一大方界能化四種八部所

仰也。彼千百億中其一也。故梵網經云、「我誕生閻浮提

迦夷羅衛國、父名淨飯母名摩耶、七歲出家卅成

道」。是施鹿林苑之教主、三轉法輪之化主也。三身正覺

略以如此。 弥陀如来有此三身成道。

今案此仏化儀、依因位悲願「唱西方正覺、以四十願力」

引撰十方衆生。此願趣勝也、此願最上也。如尺尊以五百大

願力「出世御娑婆世界、一期八十年之間利物度生、八十八

滅「止化帰真。化道不遍」願力速尽。如薬師如来「十二

悲願、像对穢土衆生又就一時利益。衣食諸根宛

具、衆病悉除身心安樂等也。雖有乃至菩提之詞、傍而

非正歟。今此仏悲願者、横被十方世界。故每願初「皆云」16オ

「設我得仏」。十方衆生豎窮未來際。十方界衆生悉尽

不往生者、仏寿命不可窮故也。称念至十念、引撰之

也の下、空白

成道者一大、衍か

此の下、約七字分空白

十の下、八脱か

行末の八は入の誤り

横、旁の上を水に作る

不捨。所被至十惡凡夫、濟度之无簡。淨土殊勝易往、
「佛身」大易觀。尺迦一代教化、如夢過了。彌勒当來
下生、被「遠難期」。今当「一」佛中間若无弥陀悲願者、
末法凡夫、馮何「出離」哉。薄福群類、依誰力「離生死」
乎。故一切菩薩願行、以普賢文殊「為規模」為龜鏡。

然普賢願、專願往生極樂願文^{云々}、

「願我臨欲命終時」等^云。具可誦之。又教行者^云、「能出三

界 大苦海中 拔濟衆生 令得出離 皆得往生歟

阿弥陀仏極樂世界」^云。文殊願^云、「願我命終時、

尽除諸障導、面見阿弥陀、往生安樂国」^云。』^{16ウ}

二聖願文一同无異。故三国相伝、四衆一帰以弥陀「為本

尊」、以念仏^為所行、廻向三業所修、皆欣九品往生。依亡

禪定如院聖靈、一生念仏无懈、百万反数幾許。最後

御惱无忘御事、毎日万遍无一犯。臨終御本尊ハ往年

造修之御尊、三尺迎撰之像、定奉見瞋目御降御歟。

今又中陰四十九日之間、毎日開眼供養^ラ。案次第

御皈依、上品往生文不可疑者歟。以上御仏功德ス。

15 又阿弥陀別願尺

^{云々}の下、約五字分空白

歟、不審

如ハ女の誤り

瞋ハ瞋の誤りか

開の上、囲を消す

夫弥陀別功能者、四十八願也。

發此大願^ヲ給^シ根元、尤可申開^ニ事候也。昔娑婆世界^ヲ

散提嵐國^ト申^{ケル}時ニ、大王御シキ。無上念王^ト申。俄^ニ道心^ヲ

發^テ、生死无常也、思無安直所ナリ、今生ノ榮花ハトテモカク

テモアリヌヘシ、後生菩提^{コソ}大功ノ事ナレトテ、為^レ仏道^ト」17オ

修行世饒王^ハ仏ノ御前^ニ參^リ御スニ、仏大王猶頭アレハ、常^ヨ

リモ引ツクロヒテ、迎陵類^ハ迎御声^ヲ无窮ノ弁説例^ニモ超

過^テ、御説法^ヲ目出^クトケル間々、歎喜御身^ニ余^テ染心肝^ニ御ケルニ

依^テ、遠御有事^ヲ忘^テ仏^ニ申^給ケル様ハ、「我^ニ出家^ヲ許^シ給。仏御

弟子^ニ成^テ、仏道^ヲ修^行シ倍^シ者也」ト申^給フ時ニ、仏御返事^{コソ}哀^ニ覺

候へ。「生死无常也、朝^ニ生^テ夕^ニ死^ス。榮花^ハ无^馮、昨日^ハ榮^テ今日^ハ衰^フ。

芬覆梅檀^中ニモ常^ノ使^ハ乱^レ入^リ、玉樓紫殿^ノ簾^中モ生死^ノ敵^ハ所^モ

不^キ□^ハ。大王^ノ御身^{ナリ}トモ、死^シ玉^ヲ惡趣^ニ可^ク返^給。尤^モ出家^可然^レ」被^レ仰

シカハ、十善^ノ御本誓^ヲ一切^テ、法藏比丘^ト申^ス名^ヲ付^キ給^テ、仏御弟子^ト也

御^シ候^シ事^{コソ}哀^ニ覺^候へ。比丘^ハ仏^ニ申^給様、「諸^ハ仏^ノ淨土^ヲ多^ク見^タク候^ソ

ヤ」ト申^給時ニ、仏^ケ安事^{ナリ}トモ、一十^万億^ノ仏土^ヲ現^給テ、一々^ニ此^ヲ託^見

給^フ。或^ハ以^テ金銀^ヲ為^レ地^ト土^モ有^リ。或^ハ以^テ瑠璃^ヲ為^レ地^ト土^モ有^リ。或^ハ以^テ沙渠^ヲ

為^レ地^ト土^モ有^リ。或^ハ以^テ瑪瑙^ヲ為^レ地^ト土^モ有^リ。淨土^ノ莊嚴^種種^無尽^シテ、

本文、前行に追い込み
功の下、徳を消す

功は切の誤り

遠は還の誤りか

常の上、無脱か

□、買の如き難読字

タク、候の傍訓の形

トモ（合字）はトテの誤りか

銀、食偏に作る

不可勝計。抑此等淨土ハ、何ナル善人ノ生ル、国土ソト一々見給ヘハ、或

起立寺ノ生シタル土モ有リ。或ハ造仏写經ノ輩ノ生タル土有リ。或持

戒精進ノ者ノ生シ土有リ。或ハ散花焼香者ノ生タル土モ有リ。凡万行

万善ノ者ノミ生レテ、五濁乱慢ノ衆生ノ可生^ニ土一土トシテモナカリケレハ、

爰ニ法藏比丘大ニ難之^ヲ、「於未來惡世衆生^ニ者、三世諸仏本

誓^ニモ被捨、十方ノ淨土^ニモ漏^レタル生死界ノスモリタラン事、悲事也。

何トシテカ、造惡ノ凡夫ノ可生土ヲハカマフヘシ」ト悲給ヒシ。仍罪人ヲ為

迎^ニ、西方極樂淨土ヲハカマヘ給テ候也。サテハ彼土ニハ、何レノ善根ヲ本願ト

シテカ造惡ノ衆生ヲハ迎^ニヘントアテガヒ給ニ、以起立堂塔^ヲ本願トセハ、有

得^ノ者ハ少ク、貧窮ノ者ハ多シ。衆生可濟^ニ少^ク。以智慧高才^ヲ為本

願^ト者、有智者少ク、无智者ハ多シ。多ク衆生モルヘシ。以多聞多^ク』18オ

見^ル為本願者、多聞多見者ハ少ク、多門少見者ハ多シ。多^ク衆生

可濟^ニ。以持戒精進^ヲ為本願者、持戒精進者ハ少ク、破戒罪根

者ハ多シ。多无衆生可濟。万行万善一行一善ト少アレトモ、造惡ノ凡夫ノ可

迷往生^ヲ行ハナカシ。仏、サウニハイカ、ニハヘ□ト思食ス之処ニ、六字ノ

名号^ヲハカリ、相續易行ノステ凡夫ノ所行堪^クテ可迷往生^ヲ行也ケレト

案シフセ給テ、檀戒忍進禪等ノ万行万善ヲハ皆撰ヒ捨テ、専称

名号ノ一行ヲスクリ取テ、為本願給ヘルナリ。此事極タル難思事ナルカ

寺の下、輩・者など脱か

候、字体攸

多門は少聞の誤り

□、キカ
処ニのニ、第二画不明瞭

レ、りに重ね書き

故ニ、五劫ノ間思惟シ給フ也。サテ、四十八ノ大願ヲ発シ給候シナリ。「抑此願

可^{クハ}成、大千心感^{シテ}動キ、虚空ヨリ諸ノ天人当^ニ雨^シ珎^シ妙花^ハ」願シ給タリ

シカハ、御詞未終大地六種振動、天ヨリ妙花フリテ法蔵比丘ニカ

、リタリシカハ、サテハ我願ハ可成就ト思食之処ニ、天声

有テ告云、「決定必成无上正覚」文。文意ハ、決定テ必ス无上』18ウ

正覚成給ヘシト申文也。サテハ我大願ハ已ニ成就シヌト、得^テ

決定心^ヲナノリ給様ハ、 「我建超世願、必至无上道、

此願不満足、誓不成正覚」以上。願ノ心ハ、我レ已ニ超世ノ願ノ

発ス。必无上道ニイタルヘシ。此願不満足^ハ、誓^テ不成正覚^ニ御

誓言アリシ也。而ニ「成仏以來於今十劫」ト宣タリ。若此願

不成正覚誓願シ給ヘル仏ケナリ。成仏シテヨリ十劫ヲ経給

ヘルハ、御願成就ニライテハ無疑事コソ候ナレ。サラウニハ、我等

衆生ノ念仏往生ハ、ウチカタメタル事ニ候也。大方ハ弥陀如来、

造悪ノ凡夫ヲ迎シ為ニカマヘ給ヘリ。我等ハ在悪生死ノ凡夫

ナレハ、広大无边ノ報土エハ争カ可生ナト、怯弱ノ心ヲコスヘ

カラサル事也。サレハ和尚問答シテ云ク、「彼仏及土、既言報

者、法報高妙、小聖難詣、垢障凡夫、云何得入^{トコト}」』19オ

問給ヘリ。問意ハ、仏及土既ニ言ハ報ナリ。報土ハ高妙シテ、小聖

上のり、某字に重ね書きし更に傍記

ハの下、約三字分空白

不成正覚の上、脱あるか

への下、シを消す

詣は階の誤りか

難階。垢障ノ夫レ凡、云何得入、問給候也。答之給、「若

論衆生苦障、実難欣趣。正由託仏願以作□

縁、致使五乗齊ク入」矣。人ノ意、論衆生垢障者実難

趣、而仏本願乗テ、善人悪人モ凡夫モ極テ五乗ヒトシク

往生スルナリ、ト答給タルナリ。サレハ阿弥陀仏ノ本誓悲願、

難有貴覺。四十八大願發シテ極樂世界ヲ莊嚴シテ、

十方淨土ニモ被擯出、三世ノ諸仏ノ本誓ニモモレタル未

來惡世ノ造惡ノ凡夫ヲ、願力ノ船筏ニ乗テ迎取給事、

難思ノ利益ニ御ヘシ候。サレハ阿弥陀仏ノ本誓願ヲ思ツ、ケ

ルニ、我等衆生カ往生ニライテハ、不可疑事候也。就中信

心大施主、五更ノ御枕ニ夢覺ニシテ、我既ニ齡及七旬、余命」^{19ウ}

不幾、无常ノ風セメキタラヌサキニ、輪廻生死苦ヲステ、西

方淨土往生センカマヘセムト思食シ取テ、丈六ノ弥陀ヲ造立シ

四十八度ノ供養ヲトケ御ス事、真実ニ難有御志ト覺

候。而レハ即大施主并ニ女大施主、千秋万歳終最後臨

終之夕、紫雲西方ヨリ聳、紫雲中ニ満月ノ尊客頭、

觀音勢至者紫雲ヨリ下リ、漸ク草菴ノ窓前ニ歩ミ

近付テ、金蓮台ヲサ、ケ給ヘシ。仍大施主三尊ノ來迎ニ

□、難読。強の誤写か

人は文の誤りか

本の下、願を消す

シテ（合字）、メとも読める。ニが
衍か

客は容の誤り

窓、心の上を家の如く作る

アツカリテ、遂ニ一仏浄土ノ台ニ乗シ御テ、見仏聞法之

庭ニハ一面ニサシ、住行向地之位ニハ一時ニ上テ成仏之面因ヲ

ホトコシマシマサン事、不可有疑也。兼又ナクハ又一結ノ諸徳大

衆、入來聴聞之尊卑ノ界女、同ク一仏浄土之縁トナリテ、

必ス四弘願海ニ可遊給。仰テ承ク、西土教主阿弥陀善』20才

逝、伏乞浄土三部ノ妙典仏法合力シテ、御願ヲ必ス令成就

給へ。供養浄真言一□誦丁云。

所修功德廻向三宝境界々々。天衆地類々々。貴賤靈等々々。

行疫神等々々。法界衆生々々。无□大菩提丁。

16 ○信濃国善光寺阿弥陀事

仏在世之時ニ、有一長者。名ヲ曰フ月蓋。于時ニ世間ニ疾病更

発シ、諸人臥病床ニ。依之月蓋カ家中、貴賤皆為病所

悩。其中ニ最愛ノ娘一人アリ。依病患ニ万死一生也。然而トモ

不叶著婆薬モ、鷓鴣ノ方モ无由シ。父長者愁歎ノ余ニ、参テ

尺迦如来御所ニ申云、「我有最愛女子。依所勞ニ万死

一生也。願ハ无上世尊救給エ」ト涙ヲ流シテ申給ケレハ、尺

尊被仰ケルハ、「必死定業ノ病也。我ハ不能可救」云。』20ウ

長者重テ申云、「尺尊ハ是三界ノ特尊、四生ノ主也。慈

因(異体)は目の誤り

界に付訓して男と訂したらしい

□、切か
丁云の下、空白

□、上か

発の左下にシテ(合字)の如き字あり

鷓、旁も昔に作る

悲深重ニシテ、一切衆生ノ苦患ヲ救ト云御志深ク御ス。

設雖定業病、以神通方便力、今度ノ吾子ノ壽命救

給エト仰天、伏地申ケレハ、尔時ニ尺尊被仰ケルハ、「我ハ

不可叶。從此西方ニ、阿弥陀仏ト申仏御ス。精進シテ七日

々々无断絶奉念」云。仍如尺尊教□、一心ニ念スル

程ニ、七日満テ三寸ノ金色ノ阿弥陀ノ三尊現官中、照月

蓋家。サテ其仏ヲヤカテ取テ奉安置、サテ娘ノ病

即時ニ平愈。サテ其仏一鉢ヲ唐土ヘ渡シタリケルカ、

自ラ日本国ノ津国ノ難波浦ニ天王寺ト云所ニ御座タリケル

ヲ、信濃国ノ本太善光ト云夫男ノ夢ニミエ給ヒテ、「彼国ニ可レ行」ト

有被仰ケル間々、夜ルハ負善光、日ハ仏ヲ負テ、信乃国ニ」21オ

至テ安立彼寺。即示現、「我ハ月蓋カ前ニ現世シ仏ナリ」ト云。

以之請観音經文□見合ニ、少シモ不違。故云善光寺。

又或伝記云、原夫善光寺者、本師阿弥陀如来者

尺迦大師在世之時、毘舍利国月蓋長者隨尺尊

教示、正向西方遙致礼拜、懇懃ニ念持ス。尔時ニ无量

寿仏觀世音得大勢至三尊、身ヲ一擦手半ニ促テ、現ニ

来住シ長者門閭給ヘリ。長者西ニ見ニ一仏ニ菩薩、忽ニ

スの下、約二字分空白

□、朱十力。勅か(訓ではない)の下、念を書き掛けて消す

愈、口偏あり

□、ヲか

行末の者は或いは昔の誤りか

間は或いは闕の誤りか

以紫摩金^一所奉鑄写彼尊容^一也。月蓋遷化

之後飛騰^{シテ}虚空^ニ致百濟國^ニ。歷數十年^ニ、自彼國^一

便浮波^ニ、天國排^テ開広庭^ニノ天皇治十三年歲次壬

申冬十一月十三日、来我朝^テ日本國難波津^ニ、其後

多歷年序^ヲ、三十七年仏法始^テ流布ス。仏像之権興^一 21ウ

也。故俗呼号之本師如来^ト。推古天皇治十年夏四月八

日、依如来之靈託^ニ降シテ聖主之綸旨^ヲ、奉福信乃國

水内郡善光寺^ニ。誠是仏法最初之金容也^云。

17 ○弥陀尺

於此仏依正二報功德^ニ者、報身報土^カ

応身応土^{カト}申諍候。先報身報土^ト云事ハ、浄土論^ニ、

「觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虚空、广大无边

際」ト云文^ヲ為証拠^ト候。サレハ善導モ同ク報仏報土^ト尺給

仏^ヲ、天台^ハ、応身応土^ト尺給ル^ヲ、從浄土宗无被^ニ云事ナリ

被不審候ヘトモ、真實^ニハ、応身応土^ノ様、現証ガ多候。

如請觀音經者、阿弥陀仏无量百千億劫涅槃之後、觀

音成正覺、号普光功德山王如来。国土号衆宝普

集莊嚴。彼如来入滅之後、大勢至菩薩即於其國成仏、』 22オ

モはシの誤り

本文、前行に追い込み

ナリの下、ト脱か

涅槃、底本末

号善住功德宝王如来」ニ。加之、普賢讚云「阿弥陀仏」。

18 ○釈迦

釈迦如来者我等衆生能化之主シ、忍土之導師也。久成如来

ナレトモ、仮ニ定^{シテ}淨飯大王父^ト為^レ广耶夫人母^ト、十九^{ニシテ}出家卅

成道給後、設四時三教方便、調機於一円。始出靈鷲

山說法花経^ニ時、「如我昔所願、今者已満足」ト説、「一切衆生皆

成仏道」ト宣テ、一偈一句持此経権護セント願ヒ、聞名号者

定如彼セント誓フ。所以、若聞尺迦牟尼名号^ト

奉讚釈迦如来相好^ト詞云、釈迦如来凡夫之時、経三

第阿僧祇劫^ト、為衆生^ニ発心。三千大千世界之中ニ、芥子許モ

无不捨身之処。然而トモ猶^ラ為衆生利益、雖生王宮^ニ厭^ム」22ウ

五欲^ニ、離父母行道樹下、四魔怨敵^ヲ降伏シ畢テ成仏シ給フ。

内証外用ノ功、存畧^ト耳奉尺^ニ候。内証者、三覺四弁五眼六

通等功德也。先三覺者 次外用功德者、卅二相八

十随好等ノ種々功德ナリ。无見頂相者、梵天モ不見之^ト。面輪

端正コトハ、如十五夜月^ト。首上ノ羅髮ハ、如卷^ル青糸^ト。眉

間ノ毫相ハ、如磨星^ト。両ノ御眉ハ明月^ヲ並ヘ、四十ノ御齒三冬ノ雪^ヲ

この行、空白。省略か

定の送仮名シテ(合字)はメの誤りか

権は攤の誤り

号の下、約四字分空白。省略か

詞、誤字を書き掛けて消す

第は大の誤り

耳(?)は可の誤りか

三覺者の下、約二字分空白。省略か

糸、色を消して傍記

合給歎ト疑。二部眼ハ、不異青蓮。御臂ハ、似赤菓。紫磨金ノ膚ハ鮮白トシテ无塵、千福輪ノ跌ハ沓土ニ離土。

如此等諸相好ハ、皆先世ノ仏道修行故也。「雖未発心、已是菩薩」ト云ヘリ。既知、我等皆菩薩也。云事尤至要。如来坐供養共敬便也。

19 ○又釈迦尺

如形奉尺、々迦如来為娑婆穢惡之衆生、此土唱成道。給。此娑婆世界ハ五濁乱滿境、惡業染重処、難化徳

難及者ナリ。(一トリ浄飯大王ヲ為父、摩耶夫人為母「伽毘」

サレハ諸仏捨化土、儲浄土、菩薩簡此土不申弘経。其二尺

迦如来一トリ、浄飯大王ヲ為父、摩耶夫人為母「伽毘羅

城託生シ、摩訶陀国成道シテ、種々ノ方便シテ利益衆生。

貧女ノ一涕濁水受悦之、善男カ一房花モ歡喜シテ納

受。微少善根ナレトモ悦之「随喜之」、授ケタマフ未来成

仏記前。在世利益、実不可申尽。我等衆生、尺迦

滅後及二千年之末受人間生。在世利益ニハ漏トモ、

教迹流布之砌蒙利益事、非可異在世之昔。所謂婆

婆是穢惡充満足処、人心極諂曲也。非可在交見、皈

福は幅の誤り

也の下、一字分空白

共、或いは恭の誤りか

標題、前行に追い込み

(一)内、抹消

足は或いは之の誤りか
皈、字形不整

円寂事有近。教法留テ未来惡世衆生利益ト思食、』23ウ
四十余年之間説置半滿權実教法、勅弘經大士、広令

流布闍浮提。我レハ靈鷲山隱住、向經卷數「善根ヲ

イトナミ功德ヲ企ル砌ニハ、我遠照シテ不異在世「利益ヲ施ント思食

者也。サレハ今日、四八妙相ニ投奇珍「顯也黄金ハタヘ、

以金玉「ミカク慈悲之御躰。在世ノ昔ニ似タリ。貧女一涕ノ水、善

男ノ一花、猶離惡趣「預記蒞。況今日作善ヲヤ也。

20 ○釈迦尺

夫尺迦如来者一代五時之教主、三界九

地特尊、淨飯大王之太子、广耶婦人之所生也。十九ニシテ

城ヲ超エ、三十テ成道シ給ヘリ。立五百大願、三界六道四

生八難廿五有ノ一切群類ヲ、皆房束「如我子」思食シ、

乘「一子大慈悲、唯我ノミ救ント誓給ヘリ。法花經云、「今此三

界皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此処多』24オ

諸患難、唯我一人能為救護」。或ハ尸毘王之時、代鶴「与

肉於鷹。或為薩タ王子之時ハ、哀飢「虎与身給ヘリ。

或為翁妻子、或ハ眼目ヲクシラル。如此三千世界之間ニ

為難行苦行、不捨身命「所針指許モ無之。如此衆生ヲ

也、不審

男、界を修正

本文、前行に追い込み

利益シ給フ仏也。若尔者、今日ノ尊靈設ヒ地獄ニ落給タリトモ、

閻广王ニ乞情ケ、或ハ獄率牛頭馬頭阿防羅刹ヲ降伏シ

聖靈ヲ奪取、或施難化必能化之徳、或ハ放拔苦与楽

大光明、地獄界ヲ照曜シ給テ、地獄ノ釜ハ皆破失テ成清涼之

池、蓮花開敷シテ、尊靈一人ノ故ニ地獄ノ罪人多ク離苦

得楽シ往生セン極楽ニ事、貴事ニ候也。

21 ○舍利事

或書云、「尺迦ハ諸仏ニ勝給ヘリ。所以者何ハ、

過去ノ迦葉仏当来ノ弥勒ハ、御舍利在一寺ニ不令分散。』 24ウ

鳩留孫仏物那舍仏、亦如此。尺迦独リ利益周遍也。」

22 舍利神反利益事

呉王試舍利、以金剛打之、全ケ以テ

不碎。投猛火、銷反成蓮花云。我朝四天王寺ハ、仏法最

初之寺也。舍利屢現神反増道俗信、歟今不止。如楼云

土仏舍利、无量ノ国ニ至テ示現仏身。頂王如来ノ舍利ハ、經

無數劫、演説正法。今尺尊舍利、亦以如彼。往師国

現身説法ト、宛如真仏。諸方国ニ亦有此利益。誰カ知テ不レ貴耶。

23 ○舍利供養功德事

情は請の誤りか

本文、前行に追い込み
書に付訓して書と訂すか

迦の上、物を消す
物は拘の誤り

本文、前行に追い込み

歟、不審
云土は至の誤り

演は或いは演の誤写か

或書云、「有_二三種福_一。初得_二尺

梵_レ轉輪之座_一。後_{ニハ}坐_レ大宝花玉床_一」。法花經云、「供養一花

一香、乃至一称一礼之者、皆菩提必定」々。

24 ○弥勒

次奉_レ釈_二弥勒菩薩別功德_一者、夫弥勒者此仏、其名称慈

氏。發心已後不食肉故、為名。大慈_レ販胸_二哀三有群_一』_{25オ}

類_一、大悲銘肝_二覆十方含識_一。補_{ツイヒテ}成_レ仏_二釈尊_一、成_二

以導師_一、受付囑於先仏_一、期得脱於龍花_一。尺迦

如来遣法弟子、寔雖久住娑婆罪人_一、当来慈

氏之龍花樹下_{ニハ}、將_ニ為新成正覺_一仏陀。依之弥勒上

生經云、「若但国名号者不随黒闇处、一称名者除却

千二百劫生死界」。加之法花經文_{ニハ}、「其後当作仏_一」。況

供養恭敬人、百年終不懸阿防_一呵責_一、必迎撰兜

率内院_一給事、可依此功德也。或書云、「弥勒尊像表

因果_一。其故_ハ、印相_ハ甫_レ処_一印也、即因也。頭_ハ如来相也、即果也」。

25 ○弥勒尺

今此菩薩者当来三会之導師、娑婆五

濁甫_レ処。梵云梅怛利曳_一、或阿逸多_一。此于慈氏_一、或慈

本文、前行に追い込み
福の下、一字分空白

標題、前行に追い込み

国は聞の誤りか

本文、前行に追い込み

于_レは云の誤りか

姓。如思益經、「若衆生見之、即得慈心三昧、故名慈氏」文。』 25ウ

文意、此菩薩者在凡地、立菩薩行願之時、見於衆生宮初

者は昔の誤りか

導心。故若聞其名号乃至見身者、心得慈心三昧、皆

至不退位。凡菩提サタ悲願、広亘三世、隨宜益物利

生、遍及九界。然如来滅後衆生者、偏可仰弥勒大士

本誓也。其之由何者、此菩薩与尺尊同時ニ発菩提心、苦

行菩薩道。然尺迦ハ身心未熟、第子已熟。弥勒ハ自身

已熟、第子未熟。故尺迦第九滅劫人寿一百歳之時、

滅は滅の誤り

前成仏候。弥勒於第十滅劫人寿八百万歳時、当得作

同右

仏。然為尺迦甫処ニ在第四都史多天摩尼宝殿内、

為化諸天衆、説大悲法門。亦過五十六億七千万才

都率来下、示誕生於翅頭摩城、唱正覚於龍花

樹下、誘機於四悉、説法於三会。其初会説法ニ八九』 26才

十六億人得益、第二会中九十四億人開悟、第三会之

時九十二億人得脱々。三会令論、二百七十億女人也。然

令は合の誤り
女、不審

三会得脱人、是尺尊遺法第子也。故或大乘經云、「我

今第子付弥勒、龍花会中得解脱」云。尺尊遺法

第子付嘱弥勒菩薩。故遺法諸第子、偏可馮此大士之

慈悲願。況一施一称人一花一香類、必生慈尊之出世、可蒙隨宜之接。此是弥勒大士之本願、尺尊付囑

遺誠也。彼共命是雖一、遺心於兩方。魃鉏是二、点

行於一序。其吹頑愚之一身、祈二仏化道。二仏同心、道

肋一身之志願。嗚呼過去千仏世、空通利生之翅、現

在四尊時、徒漏慈悲衣。哀哉、无明睡深大夜未

曉、妄想雲原戒珠掩光。再還三途、吁悔トモ何益。』 26ウ

依之仰当來導師引接、欲蒙三會之得脱。聖心徒

不起、必藉縁起。機縁孤不熟、必由仏熟。孔雀一鳴、興

風於南山。雖多未犯四重五逆之罪、善根雖淺、非无

搏一聞功。依是以今日寃无之小善、期遙期未來象

王之大果。近祈仏天、遠ハ垂慈恩。龍花春蘭林、折

教行人理之花、鷄林秋梢探開示悟入之菓。造立

供養志、廻向如此。滅罪生善之曉、有何疑矣。

26 ○文殊

文殊師利菩薩者、過去ニハ申ス龍種姓尊

王仏。今即震旦漢土清冷山妙吉祥菩薩。尺迦如来

九代祖師、三世諸仏覺母也。故般若ハラ密ノ色ニ顯テ、

誠、字形不整

頑、左側をネに作る

肋は助の誤りか

原は厚の誤り

上の雖の上、脱あるか

上の期、衍か

本文、前行に追い込み

且、字体且

智惠法門成形。旧住娑婆^ニ覆^ニ十法界、遍滿十

方為三世師。燈明^ノ仏之古号妙光菩薩、覺^{モラ}八王子^{ナツテ}。』 27オ

尺迦如來之^ノ今^ハ、稱^ニ大聖文殊、答正^ニ慈民間^ヲ。在世^ニハ列八万

大士之首^ニ、滅後諸大乘經初^テ我聞^ト云ヘリ。受妙吉祥之利益^ヲ、

亘三世十方不斷。大聖文殊化義、廿五日定。

27 ○又文殊釈

次文殊師利菩薩者、三世諸仏成覚智母、

一切衆生發心導師也。梵名曼殊師利、此翻曰妙吉祥。

妙諸仏智惠、所謂般若也。吉祥福德莊嚴、能攝

八万善^ヲ。二諦相並、以立其名。經曰、「若見形像者、百千劫

中不墮惡趣。若受持名号者、常生他方清淨仏

土^ニ云。又云、「毀謗我者、嗔恚我者、輕慢我者、薄賤

我者、願与有縁令發菩提心。毀謗嗔恚類尚殖仏

種。況称念帰依輩、豈漏^ニ引導^ヲ」畢。

仰願大聖文殊垂加被、忽然發广大心、決定趣善菩提門給へ。』 27ウ

28 ○普賢

次普賢大士者、恒順衆生薩埵、懺悔滅

罪教主也。今此菩薩、有事理二身。先理身者、經云、「一切有

民は氏の誤り

本文、前行に追い込み

也の下、某字を消す

謗、方偏に作る

畢の下、約四字分空白

本文、前行に追い込み

情皆如来藏、普賢菩薩自躰遍故」。又云、「普賢身相如虛空、依□而住非国土」文。次事身者、行者ノ前示白玉身也。花嚴經云、「若人臨終時、眼不見色耳不聞声身不觸覺、唯有第六微識、諸根漸散懷、父母妻子眷屬知識皆悉弃捨ス。唯此願王ノ不相捨離、於一切時引導其前、一刹那中即得往生極樂世界」。一生作業所望只是極樂也。普賢願王、願消滅六根罪障、必引生九品淨利給。

29 三宮本地事

又普賢菩薩者、三宮御本地也。断道之頂其因周遍曰普、断道之後隣極聖曰賢。大論觀經同名遍吉、法』28才花称普賢、皆漢語也。梵音姉跋陀。非』花經云、「我誓於穢惡世界行菩薩道、使得嚴淨。我行、必勝諸菩薩」文。凡此菩薩、故為宝威德上王仏甫処、遙聞此娑婆世界尺尊說法花經、不堪忍法心、齊現威德神通之力、引率天龍八部等、以四要法勸發。法花經ニ云ク、「若法花經行闍浮提、皆是普賢威神之力」。二万八万大士、藥王藥上ノサタ、受尺尊教勅、皆我モクト法花經ヲ弘通給事ニテ

□、身+真。傍記の形を誤写したか

標題、前行に追い込み

非』は悲の誤写らしい

娑婆、底本女女（此女を一字のよう
に書く）

コソ候へ。何ノ菩薩ハ威徳ヲロカナル事候。皆知断隣円極徳行

齊等、法王菩薩達ニテコソ御候。「若法花経」等ラ云事、如何可得

心。実ニモ普賢ハ以実相理ニ為躰故、法花正躰□レハ、如此

説歎ト得意タリ。サテハ奉レ讚普賢色身、法花一部ヲ

称揚ルニ皆足ヌルコトトコソイ、ヌレ。大般若理趣分ニハ、²⁸ウ

「一切衆生皆如来蔵、普賢菩薩自躰遍故」。可委尺。又有一因

縁。大論九三言ク、「如大月氏国西仏客髻住処一仏面中、有人

癩風病来出辺菩薩像辺、一心自帰命遍吉功德、

願除此病。是時遍吉菩薩像即以右手摩其身、病即

除愈」。滅罪生善ノ是大法主ト御意ナレトモ、有待依身苦

痛甚難忍故、依願王威力ニ如前蹤テ除愈御事、

弥現当二世利益、二共大事ニテコソ候ハメ。大方ハ、普賢

菩薩者懺悔教主也。而今日、七日修懺法被レ救没後

追福、七、之結願当。尤可機感相応歎。懺悔方法

普賢経説候様ハ、「一切業障□皆從妄想生、若欲懺

悔者端坐思更実相、衆罪如霜露恵日能消

除、是故応至心懺悔六情根。我心自空、罪福」²⁹オ

无主」。此文意。又経云、「如是相者、名大懺悔、名莊嚴懺悔、

□、ナカ

皆の下、是を消す

客は肉の誤り
面は図の誤り
辺は遍の誤り。その下、吉脱

□、海か(旁は明瞭)

更の右のイ、抹消記号か

相は想の誤り

名罪相懺悔、名故懷心殘。行此懺悔者、身心清淨シトモ不、住法中、猶如流水」。其取罪障如虛空洩。懺悔力故何輒可除之耶。天台十疑中間答也。「衆生无始已來

造諸惡業、又不值善知識、復作一切罪无惡不

造、云何十念成就即得往生」文。答之、立三道理。「一者在

心、二者在緣、三者決定。心者、造罪之時自從處

妄顛倒心生。念仏心者、從善知識聞說阿弥陀仏

真実功德名号生。一虚一実、豈得相此」疑又。「譬

如万年暗日光暫至、暗即頓除。豈有少來之暗、不

肯滅哉。在緣者、造罪之時從虚妄痴暗心生、

緣虚妄境界顛倒至。念仏心、從聞仏清淨真」29ウ

実功德名号、緣無上菩提心。一心偽、豈得相此」疑歟。「譬如

有人被毒前深傷肌至骨、一因滅除業波、即前出毒

除。豈以深毒而不肯出也。在決定者、造罪之時以有

間心有後心也。念仏之時以無間心故於後心、是即捨

命善心猛利」云。普賢觀經云、「第五懺悔者、但

当深信因果」文耳。又云、「亦第一義甚深空法、一

彈指項除劫十四万億阿僧祇劫生死之罪」。

罪の上、無脱
故懷心殘は破懷心識の誤り
トモ（合字）、トテ（合字）を訂す

耶の下、一字分空白

以下の引用文、誤脱多し
下の心の上、在脱
處は虚の誤り

少の右、某字を注記

前は箭の誤り

云の下、共に一字分空白

項は頃の誤り
上の劫は却の誤り

30 ○普賢菩薩尺

今此菩薩ハ等覺无垢大士、入重玄門之

サタ。居衆伏之頂号之為普、在断道之終呼之

為賢。法身遍法界、智惠滿虚空。色像无有量、音

声^モ参而。慈悲兼九界、行願通十種。恒順衆生之利

益、横堅起機、无縁无作化道、冥顯在意。此是一乘』30オ

發起先達、六根懺悔教主也。十方法界山河大地、无非

普賢サタ之色身。六道四生螻蟻蚊虻、皆是隨縁感

現之利生也。如或大乘經云、「普賢身相如虚空、依真而

住彼国土、隨諸衆生心所欲、示現普身等一切」云。文意、

此菩薩居法性澗、以如々為躰、為問衆生機縁、非色像与

現色身。夫非色悲心之月、雖処第一義空之中、无形現

形影、常浮生死泥濁之水。所以アヒ三熱焰底、恒順衆

生故不相離、紅蓮八寒冰上、類応同故暫不捨。況

鬼畜修羅、人天善趣。此則普賢之理躰、周遍法界

之依正也。是以方法是真如、隨縁真如故。真如是万

法、不反真如故。迷此理為衆生、悟此為仏。自躰含万法、衆

生即仏也。迷理為衆生、悟此理為仏。如普賢觀經云、「我』30ウ

本文、前行に追い込み

普の下、賢を消す

悪は恵または徳の誤りか

悲は非の誤りか

心自空、罪福无主」此謂矣。抑此普賢菩薩、昔在凡地之時、發

種々願、遍於微塵刹土之中、利益一切衆生。三世諸仏所常

為發起対楊之主、十方サタ中而為懺悔滅罪之基。応

用風冷遠弘分段之塵、悉且花鮮遥薰塵刹之境。

娑婆穢惡之世界得一乘勸發稱、威德淨王之国土

施十種願王德。広令流布之誓為如来滅後方軌、

使不斷絶願円頓行者依怙也。三七日夜精進乘白

象而現前、後五百歲誦誦示色身而説法。无謀之利

益、勅莫大哉。受某右ノ衆漏^レ尺尊驚嶺之慈父教、雖

迷无明長夜、仰普賢象決目之導師、欲渡生死苦海。

伏乞吾眼具足之朝、如磨内証三身之理、四智円明之夕、

定放外用八相之光矣。

31 ○観音

次奉尺観世音菩薩」^{31才}

者、極樂世界ニハ甫処ノ大士、弥陀如来ニハ儲ノ君、娑婆世界ニハ

施无畏者、我等衆生カ良医也。仏菩薩慈悲利生何^モ殊

勝^ニ御坐^トモ、観世音菩薩誓願、「衆生有苦、三称我名、不往

救者、不取正覚」宣リ。文意ハ、六道四生間ニ受苦^ニ者、洞燃

楊は揚の誤り
且、字形且

受は爰の誤りか

吾は五の誤りか

標題・本文、前行に追い込み

猛火苦、餓鬼飢饉ノ悲、或ハ畜生互相食耽ツル、憂、人間ノ八

苦天上ノ五衰、如此等苦ヲ受者ノ三称我名ニ往不救者、永不成

仏願給也。何況、語巧匠ヲ「顯尊像」遂供養ニ給ハ、觀音利生無疑。

32 ○又觀音尺

觀世音菩薩ハ等覺証極之居士、玄理究

竟之菩薩也。十四夜之秋月程同三五之夕。等覺分之夜

雲也トモ幾也トモ、琢ツク朗然之曉。実无心事、等覺无垢居士テ御覽。

普門品ニ説テ候様ハ、「若有无量百千万億衆生受諸苦

惱、其中若有一人奉唱觀世音菩薩名号、聞其音声」以上 31ウ

諸衆生一時皆得解脱、此故名觀世音菩薩」以上。依之法力

比丘唱觀一字離火難、孟津道故称觀世音免水難。

凡經廿五有「悉拔苦惱、現卅三身」併与其快樂。千□眼

經云、「一称我名、生々世々永不捨離、必代其苦」以上。所以往

地獄隨往、代銅柱鉄場之苦。趣鬼道不離、与耳饌蘇

施藥之業。畜生殘害ニ、施大定智慧之情。修羅國諍ニハ、

示柔和善順憶ヲモイフ。人中ノ八苦天上ノ五衰、皆消除解脱シ

給フ。現世モ後世モ、不可過此菩薩利益者也。

33 ○又觀音尺

本文、前行に追い込み

□、光か

耳は甘の誤りか

國は鬮の誤り

憶、字形不整

標題、前行に追い込み

夫觀世音菩薩者、無上念王ノ千人王子之中ニハ、第一ノ大子也。

弥陀仏ノ數ノ御弟子ノ中ニハ、第一補処也。極樂ニハ左脇ノ弟子、

娑婆ニハ施无畏ノ菩薩也。内証ハ既ニ雖究竟妙覺進給、為

衆生化度、被云大悲闍提菩薩、因位ニ居シ給ニリ。依大智門、有 32オ

成仏之時。

若依大悲門、无成仏期。衆生不尽故也。

34 ○六觀音并千手觀音尺

夫觀音菩薩者ハ、補陀落

山ニハ為彼土能化、六道四生群類ヲ導、極樂淨土ニハ為弥陀

侍者、称念往生ノ行人ヲ迎給フ。廿五有ノ衢ニハ顯廿五三昧衆

生ヲ化度、三界六道ノ間ハ現ニ六觀音姿、含識ヲ引導シ御ス

菩薩ナリ。其六觀音者、一大悲聖音、此救地獄道衆給。二大

悲千手觀世音、此導餓鬼道衆生給。三師子無畏馬

頭觀音、此ハ化畜生道衆生給。四大光普照十一面觀音、

此ハ止修羅闍諍給。五天人丈夫唯提觀音、此除人間

八苦給。六大梵深遠如意輪觀音、此消天上五衰炎

給。六觀音次第如此。次別テ奉尺千手觀音本縁者、 32ウ

者見千手經文、此千手觀音、於過去无量劫当初千光

弟子は弟子の誤り

娑婆、底本女

時の下、空白

本文、前行に追い込み

聖の下、観(世) 脱か
衆の下、生脱か

唯は准の誤り

者、衍か

王靜住如来所^レ、發誓言^ニ云、「若我当来堪能利益安樂^ニ、

一切衆生者、令我即時身生千手^ニ、千眼具足^ニ」。發是願已、

応時身上千手千眼皆悉具足^{シテ}説給^リ。然而^シ此經[□]

現文ニハ、只卅種御手^{ナリ}。此四十御手、始從如意珠手^{給至}

千補栴手、一手^モ不聊^ル、皆是利益衆生^ノ表示也。其功

能皆悉雖可奉尺^此、且存省畧^{之義}、任法主^{之願}、

為現当所求^ニ可奉尺^ニ御手一文意許^ニ。先為現世者、

千手經云、「若為種々不安求安穩者、当於羅索手^メ」以上。

同經又、「若為摧伏一切怨敵者、当於金剛杵手^メ。次為

後生^ニ者、同經言、「一切天人当須供養專称名号、満无

量福滅无量罪、今往生阿弥陀仏^ト説給^{ヘリ}。所詮為蒙[」] 33オ

此文ニ手御手心利益^ヲ、毎月ニ摺写^シ形像^ヲ、所説誦^{スル}

經王^ニ也。願ハ当堂本尊生身千手觀音、以慈悲心平

等心々、必僧覺仁守ハクソミ御セ。今日開眼供養^ノ六躰千

手觀音、遍ク以卅種手^ヲ、広ク救^ヒ廿五有衆生御セ。

又千手觀音父^ヲハ名智男、母名法術、子名遍学。世中極窮^{クシ}、

五年迷母^ヲ、七年別父^ニ。八歳^{シテ}仕師^ニ、及千歳。欲報^ニ親之

恩^ヲ、宿石木本^ニ割左手皮^ヲ、為父造尺迦仏^ヲ、為母作盧舍

□、ノカ

給は終の誤り

千は手の誤りか

畧、各の下に田

經の下、言を消す
メは文の誤りか

今は命の誤り。その下、終脱
仏の下、国脱

ソは、またはクの誤りか

セの下、約三字分空白

那仏。写梵網經、為母写法花經。左手燃千燈明。

千坏香燃、種々折行フ。廿年之間仕定光仏、得五百眼。仕

千光王靜住如来、得五百眼。仕毘婆尸仏、為五百□。

仕須弥燈王仏、成千手觀音也。

35 ○十一面觀音

次奉釈十一面者、此觀音菩薩過去タ、成之如来也。而為『33ウ

衆生利益成施无畏者、因位菩薩示也。夫十一面申ハ、加本形、

十二之形兒ヲ示現シテ、守護一年十二月、加護一日十二時也。

所以前ノ三面ハ慈悲ノ相、一切衆生憐愍スル相也。右辺ノ三面ハ

忿怒ノ相、為降伏三毒七難魔軍也。

左辺三面ハ乃至常後ノ一面ノ相ハ、皆准之可知。頂上一面如来

像ハ、正法明如来ノ形ヲ表也云。

36 ○如意輪

如意輪觀音、利益六道給。讀此菩薩文云、「諸在諸如

来 皆入為一鉢 猶如於明鏡 示現於一像」以上。右第一ノ手

思惟、愍念有情相也。此度地獄道。第二手持如意宝、

能滿一切願。此度餓鬼道。第三手持念珠。此度生道。

左第一手按光明山、成就无傾動。此度修羅道。〔乃至

上の写の上、為父脱か

本行の□、手か。送仮名の□、ヲか

標題、前行に追い込み

タ、は久の誤りか

也の下、約七字分空白

常は当の誤りか

標題、前行に追い込み

給の下、一字分空白

生の上、畜脱か

〔〕内、抹消

以大悲方便能断有情苦」第二手持蓮花、淨諸非法此度。人道。」 34才

第三手持金輪、能転无上法。此度天道。乃至以大悲方便、能断有情苦。或ハ大乘経云、觀音往地獄時、獄率驚行閻尸

法王、申此由。閻尸王アヤシミテ行見給、非第六天尸王所為、又非那羅延威力之所行、觀世音菩薩現金色身頭給ヘリ。

依之閻尸法王合掌頂礼、説偈云、「皈命蓮花王 大悲觀自在 能施有情願」以上。受除蓋障菩薩仏申給、「此菩薩成就何功德、自在破地獄」。○或経説愛染王事云、

「能滅无量罪 能生无量福 四事速円満」以上。○経云「能滅无量罪」者、大非根本義也。「能生无量福」者、金剛界果仏義、菩薩為因義也。

「四事」者、息災、増益、敬愛、降伏。「速」者、早々義、煩惱即菩提也。「円満」者、不二又性淨、円明点義也。

37 ○如意輪尺

夫此如意輪觀自在菩薩者、五鉢金色身シテ、

六臂広博ノ鉢ナリ。頂髻ニ宝莊嚴ノ冠アリ。坐自在王、住於説法、34ウ相。頂背ニ円光アリ。身ヨリ流出ノ千光明、天道ノ衆生ヲ照給。但六

臂相ハ、六道ノ衆生度スルコトヲ表ス。右辺ニ有三臂。第一ノ手ハ思惟、念有情相也。此則表度ス地獄道ヲ。第二ノ手ニハ持如意□、

能満ル一切願相也。是則表度餓鬼道ヲ。第三手持念珠□、

觀の下、世?を書き掛けて消す

受は愛の誤りか

○以下、46愛染明王尺に同記事あり云の下、約四字分空白

能に鈎点あり

本文、前行に追い込み夫に鈎点あり

天は六の誤りか

□、宝か

□、ヲか

是則表度傍生^ス衆生^ヲ相也。左辺^ニ三臂。第一手按光明山、
所願成就^{スル}ニ无傾動相也。是則表度^ト修羅道^ヲ。

第二手持蓮花^ヲ、淨諸非法^ヲ相也。是則表度^ヲ人道。

第三手ニハ持金輪^ヲ、能転无上法輪^ヲ相也。則是表度^ヲ天

道。如意輪觀音功德、存畧^ヲ如此。右ノ第二ノ能滿一切願^ノ御

手心^ヲ以、大法主沙弥円願ノ心願^ヲ知見^シメ、所願一々令成就

御座。然則海路往還ノ間^ニ、私惡風逆波之難^ヲ領^テ波浪

不能没之勝利^ニ、船中旅程、免^テ白浪綠林之害^ヲ蒙^リ而^シ」^{35オ}

得解脫之現益^ヲ御、無疑者也。兼又左ノ第二淨諸非法ノ御

手ノ心^ヲ以、大法主ノ妄想戲論ノ非法身口意業罪垢、皆悉

消靜^{シテ}、施滅罪生善利生^ヲ御^セ。現世安穩榮花弥栄へ、

後生善処^{シメ}ハ、覺月増明^{ラム}。惣者一天風和^{ニシテ}風雨順

時^ニ、四海浪靜^テ国土普潤。乃至有頂无間、无差平等利益^セハ。

止第二云、「六字章句陀羅尼、能破光障。○六字即是六觀

世音、能破六道三障。所謂大悲觀世音、破地獄道三障。○

大慈觀世音、破餓鬼道三障。○師子无畏觀世音、破畜

生道三障。○大光普照觀世音、破阿修羅道三障。○天人

丈夫觀世音、破人道三障。○大梵天深遠觀世音、天道

領は預の誤りか

滅の下、羅を消す

善の下、生を消す

光は煩惱の誤り

天道の上、破脱

三障。○広六観世音、即是廿五三昧以上。決六字下次六字

陀羅尼言、六字者他云称三宝名。一宝二字アリ。謂仏傾、35ウ

達広、僧伽ナリ。有人云、三宝為三字アリ。観世音為三字。此皆无有

標章結句、是故不用。疏ニハ「案經文」、応為三種六字之義。

一ニハ約果報、以為六字。○即広説六道拔苦功能。次約修因、

以為六字。○即広明六妙門。三約六根、以為六字」。○闔広王

説偈云、「帰命蓮花王 大悲観自在 大自在吉祥 能施

有情願」。

38 ○勢至

次奉尺勢至菩薩者、観音勢至ハ同位等

行菩薩、利生方便无差別。弥陀如来左右ノ脇土、観音捧蓮

台、勢至捧白蓋、廿五菩薩聖衆諸共、娑婆世界ノ衆生併極

樂浄土引導給菩薩ナリ。且得大勢至名ハ、五濁惡世強々難化

衆生ニ、大勢威徳猛力用ヲ施給故、名得大勢至。

39 ○勢至尺

勢至菩薩ハ観音ノ功德ヲ申シ、顕御心。但阿惟越致ノ菩提サツ、甫処

隣極ノ大士ニ御之故也。サレハ龍寸菩薩讚云、「観音勢至大名」36オ

称、功德智恵俱无量、具足慈悲救世間、普賢一切衆生

標題・本文、前行に追い込み

娑婆、底本女

標題、前行に追い込み

勢に鈎点あり

賢は現の誤りか

前」文。功德智慧慈悲本ヨリ誓、与觀音秋毫無乘^マ。相好

光明神通道力、与弥陀「明晦不幾」。或經云、「举足下足

動三千界、三惡衆生皆令離苦、故此菩薩名大勢至」。

文意、若有衆生唱此菩薩名号ヲモ、有奉念悲願^マ、其衆生ニ

為施利益「趣給時、举足下足」動三千界。所動轉之

衆生、皆悉免三惡道之苦患申意也。称念輩猶令

開悟得脱无量衆生。何況於奉顯形像「類者、二親

得脱不可有疑事也。

ヨリ、不要か
乘は乖の、フはコトの誤りか

以下三行分、空白

『 36ウ

40 ○勢至尺

夫勢至菩薩者、昔王ニハ第二ノ王子、今ノ仏ニハ右脇ノ

菩薩也。極樂ニハ來迎必定之菩薩也。十方世界ニハ大悲闡提之

薩埵也。相好光明功德、智慧神通利生、皆觀音ト等シテ

許^モ无異事。仍別ニ非可奉尺候。仍龍寸智論云、

「觀音勢至大名称、功德智慧俱无量^{リヤウ}、具足慈悲救^{グソウ}

世間、遍遊一切衆生界、如是勝人其難遇、一心恭敬頭面礼」。

本文、前行に追い込み

許の上、脱あるか
云の下、約三字分空白

其は甚の誤りか

41 ○虚空藏

虚空藏菩薩者、論^{スル}字性^ヲ一名也。虚空表

空諦^ヲ、藏^ハ表^ハ眞諦、菩薩表中道^ヲ。亡^{スル}三千^ヲ故^ニハ空也。存^{スル}三千

故^ニハ仮也。双照空有^ヲ故中也。三千空故、愛見江河涇經

謂水濁。三千幻有故、種智日月星宿赫奕^{タリ}。中諦頭

故、我性中道花鮮^{ナリ}。如^カ故[□]即空^{ナレハ}、見思ノ迷无余。藏故即仮、

塵沙ノ或尽^ス。理故即中、无明果永斷。中道ノ理性、法身如^レ」37オ

来。顯^レ眞諦^ニ現^レ隨^レ機^ニ感^レ見[、]応身如来也。空諦明四智円明、

報身如来也。爰内証ノ三徳用顯^{レハ}、名称遍法界^ニ、外現隨縁

徳、遥宝財四土。此^レ々ノ菩薩功徳也。

42 ○亦虚空藏

夫此虚空藏菩薩功徳尺者、付名号可奉顯功徳。薬師

者以十二大願薬、治四百四種病。名觀世音者、以所作利

益為名号。地藏菩薩者、真如実相大地^{ヨリ}无量結味涌出

衆施御^カ故、地藏被名給^リ。如其今被開眼^ヅ供養^ニ御^ス虚空

菩薩^モ、名号^ニ備^ニ三種功徳^ニ給^{ヘリ}。三種功徳者、一虚空者智恵莊

嚴功徳、二藏者福德莊嚴功徳、三^ニ尼珠印文有滅罪

字、滅罪生善功徳也。抑以何義、以此菩薩智恵譬^ヘ虚空^ニ

本文、前行に追い込み

涇經謂は涇渭の誤りか

□、ニか

或は惑の誤り

標題、前行に追い込み

夫に鈎点あり

也の下、一字分空白

申ニ、虚空者无寻法シテ、无有齐限。此菩薩智惠亦如是、无寻法

无齐限。无量无边智惠以所化根機、鑒、利生施御者」37ウ

也。依之大虚空藏經文、「我身即是虚空、知一切為虚空

印所印上故ナリ。此從理立名、亦是智ナリ」文。取其、世間出世智

惠利生ニ預ム計大功ナル事ヤ候ヘキ。其故、六道四生廿五有間

難受人界生ヲ乍受、愚智文亡ニシテ不弁黑白二事、不

悟仏法義理ホトノ口惜事ヤ候ヘキ。而此菩薩ニタニモ

奉帰依者、如^シ虚空ニ无寻智惠得テ經教文理ヲモ如法

悟、善惡二法モ尺尊教マ、ニ知、惡断善修、現世ハ息災

安穩利益蒙リ、後生ハ証大菩提覺位ニ至コト、実以大切事御

菩薩ナリ。次以何義、以此菩薩福德莊嚴譬藏申ニ、以世間

藏譬^ッ此菩薩出世福德頭カ為也。藏者含用万物者也。所謂

蜀江錦、冷水金、崑崙山珠、乃至綾羅絹綿、麻布五穀等

類ニ至マテモ、[□]是藏納置者也。如其此菩薩虚空藏ニモ、世間七珍」38オ

万宝ヨリ始、出世七覺八生五分法身聖財至皆悉納置、行人

施与御故、名藏、名也。依之大集經文、「此菩薩得如意神通力

故、於虚空中随衆生願、若法若財能施与、皆令歡喜、以

此方便故名虚空藏」文。此利生又為我等衆生、第一得分也。

依・大に鉤点あり
下の虚、字形不整

功は切の誤り

悟の上、性を消す
候、字体攸

[□]、皆か

生は或いは正の誤りか
しはトの誤りか

其故何、十善王位三臣九棘末孫也云トモ、貧道无縁シテ玉

冠姿衰ナラシノ袖色カハリヌレハ、賤民ニモ不異。百官皆肖、万

機悉不隨。善事仏事修ト思モ、憚^ハ无布施捧物、懈怠之

源猶預之基成テ、非一无其煩。依之庭々タル春日難暮、无可

養身命之飲食。慢シタル秋夜難明、无可弘黑暗之燈明。

而此菩薩図絵功德依、現世ハ七珍万宝飽満、善事仏事任

意、後生五分法身聖財豊、三藐三菩提位誇ホトノ目出

コトヤ候ヘキ。次以何義、广尼珠印文ニ有滅罪字申ソト云ニ、

此菩薩名号、即空仮中 三諦備タリケルナリ。所謂虚

空者表空諦、即報身如来也。藏者表仮諦、即応身

如来也。菩薩者表中道、即法身如来ナリ。忘三千依正故如

虚空、即空ナリ。存三千性相故如藏、即仮也。双照空有故、

即中道也。三千空ナルカ故煩惱江河永尽キ、三千幼有ナルカ故

取^テ其種智星宿赫奕タリ。三千中ナルカ故、我性中道ノ月輪

朗也。如此一代聖教肝心、三世諸仏内証ノ功德ナリ。空仮中三

諦法報応三仏ヲ名号ニ備給ル故、印文滅罪ノ字顯シ給也。取

其於此利生者、以前福智莊嚴勝貴ノ覚候。其故、今生

一期智恵一旦聊尔福德、来也得脱証位対ニ、非膚。我等

肖は背の誤りか

庭(異体)は遅の誤り

慢シは漫々の誤りか

飽、字形不整

候、人偏に佳に作る

中の下、約二字分空白

忘は亡に通ずるか

幼は幻の誤り

取^テ其、衍か

且、字形且
也は世の誤り
膚(?)は或いは屑の誤写か

衆生從无始「以來生死」輪廻シテ、今不帰本覺宮、悲可悲者也。

□、ニカ

悲哉、從苦趣苦、鎮以刀山劔業為「所住」。哀哉、從冥入冥、「39才
以極熱寒冰」為衣服。而今、僅依少分之善根適雖得人

界生、依破戒无慙放逸邪見等罪依、如車輪々遲復

依、一つは衍か
遲は廻の誤り

六道故郷ニ返、重種々苦患 受ケ、又无尽生滅、歎可歎事ニ
候。此菩薩供養功德由、滅罪生善利生ニ預テ、淨土菩提覺位ニ

患の下、一字分空白

進ムホトノ大切事、何事如之ニ乎。然則虚空々觀ノ月朗ニシテハ、見
思ノ長夜易明、菩薩中道花鮮、无明迷真眠早覺ム。

一実真如珠ヲ、大寂无為金剛藏納ヘキニ菩薩名号ニテ御シ候
ケルニ、サレハ大法主沙弥円願、設衆罪念喜惡業婁ハ○云。

43 ○地藏

次奉釈地藏菩薩者、六道施化大士、無仏世界利生

本文、前行に追い込み

薩埵ナリ。是以仏日陰光照イ、誰可照滅後痴闇。法水止源、何

可潤三界炎天。人事大会、此事難シ。釈迦如来召地藏

菩薩、教勅云、「現在未來天人衆、吾今慇懃付囑汝、以」39ウ

大神通方便力、勿令墮在諸惡趣」云。仍地藏菩薩白仏言、

「毎日晨朝入諸定、入諸地獄令離苦、无仏世界度衆

生、今世後世能引導」云。釈尊付囑叮嚀也。菩薩忠節不可

疑云。

44 ○又地藏

地藏菩薩者、揭羅提那山化主、

南天竺国ノ南海ニ、宝地宝樹莊嚴也。毎日ノ晨朝入恒沙

定、化无数地獄衆生。大悲勝衆輩、功德拔諸土。何者、

地者真如実相一地、含容森羅万法、无相中道法

性法界不二ノ大地也。藏者、如来真善妙有普賢三昧也

首楞嚴定也。无記化□禪道縁真如三達无畏ノ法門也。

菩薩者、以之ニ莊嚴身。故云地藏菩薩。爰十輪廻万方ニ摧三

障怨讎、宝珠照四海助五道之貧家。就中化地獄罪

人令人入仏道方便、趣諸菩薩。有処云、「地藏菩薩恒居无間、」40才

渡苦衆生。何況余地獄、等活鉄林碎骨衆合阿山逼身、

惣如此苦患且无止故」。文云、「一々地獄中、經於无量劫、為度

衆生故、而能忍是苦」文。一称南无人、利益不疑。一一念一称

輩、功德无边際。此菩薩功德如此云。

45 ○又地藏

今此地蔵菩薩、論位者、第十法雲地菩薩。尋本誓者、无仏

世界導師、中有能化薩埵ナリ。三祇ノ因行既具足、仏陀位

標題・本文、前行に追い込み

无の上、衆を消す

也は之の誤りか

趣は越の誤りか

文は又の誤りか

不の下、可脱か
念の上の一、衍か

標題、前行に追い込み

遠カラス。四依仏円満シテ、妙覺月无隔^ト。常住首楞嚴定、如

来境界悟。鎮一切智山登テ、外道邪論摧給。利益衆

生方便ハ三世諸仏之化儀受、嚴淨仏土行願十方如

来軌則伝給リ。卅九種之形現六道四生之含識導、百千

恒沙勝定遊三途八難之苦患救給。凡此菩薩、往昔无

辺劫其上、師子奮迅具足万行如来所ニシテ誓願立言、』40ウ

「窮未来際尽无数劫、六趣群類ヲコシラヘテ、成仏証果セシメム。

若不度尽衆生、我不成仏」誓ヒ給シヨリ以来、十地六度修因塵

劫前経給トモ、大悲闍提願心ニヒカレテ、今菩薩行位止リ給。毎日晨

朝必地獄之極臨、殊妙端嚴膚和焦熱之炎災、清淨柔

奕跌奉紅蓮之冰踏給。无明長夜迷衆生為、月愛三

昧光放、貧窮孤露歎群類為、如意殊王之益施御ス。

農夫為テハ甘露雨下、怖畏処堅固之城成。常三界

為住処、鎮六道依怙為。形无定形、所化衆生感応

以形トス。身无定身、九界依正以身。誠廿五有道、每道姿

示、三界六道衆生、々々每慈悲施御菩薩也。若尔者、大法

主設此善根修シ御サストモ、大慈大悲善巧ニモレ御フアルヘカラス。

何況十□三世仏菩薩无量无边御中、強此菩薩帰依御セハ、』41オ

生の下、首を消す

災(異体)は交の誤りか

殊は珠の誤り

モレ、難読
フはコトの誤り

□、方が

今世後世利生無疑、中有引道方便如指掌覺候。然則

現世榮花弥色増、後生覺月増光昇ム。冥途流転之

界、以地藏菩薩為先達。黄泉中有之惣シテ、以今日善根為

能化。惣一天風和ニシテ雨沢順時、別四郷月靜シテ幸加繼日。乃

至上有頂雲上、下阿鼻炎底モテ利益普。乃至法界平等

利益。敬白。

46 ○愛染明王尺

夫此明王ハ金剛部之中上首、金剛

愛菩薩變身也。大悲弘願有余明王ニシテ御ス。本誓方便善巧

難シテ、而引撰衆生ニ給之計也。隨此明王本誓者備一切衆生

喜見之徳、馮其悲願之類ハ入出離解脫之門者ナリ。此明

王御手ニ持弓箭者、蓋表依大悲護持力ニ而妨除スル怨敵

怖畏之義。持鈴鐸相者、即示依大悲利生ニ而衆生ニ与

快樂之徳也。又有敬愛喜見之利益。○或經云、41ウ

「能滅无量罪 能生无量福 四事速円満」以上。注云、「能滅

无量罪」者、大悲根本義也。「能生无量福」者、金剛

界果仏義、菩提為因義也。「四事」者、即菩提ナリ。四事者

息災 増益 敬愛 降伏。「速」者、早々義、煩惱即菩提也。

道は導の誤り

惣シテ、不審

標題・本文、前行に追い込み

解、誤字を重ね書きで修正

○の下、一字分空白
云の下、二字分空白

也の下、二字分空白

即菩提ナリ四事者、衍か

伏の下、一字分空白

「円満」不二、又性淨円明三点義。

47 ○不動尊尺

夫大聖不動明王者、秘密伽伽之本尊也。

遍照大日光耀本覺花台、普賢滿月影懸法界虛

空。本尊是理知不二之尊、金剛界之主ナリ。然不催三昧耶

本誓、依一子慈悲力、為大智之使者破四广軍陳、為大悲

之僮僕、撰三有之迷徒。故隱紫磨膚、現青黑色、

掩慈悲面示忿怒形。抛五智宝冠載七結之辨髮、闊

智拳之契印、持降广之幪。両目、閉左、開右、呵二乘照、42オ

一乘。二牙契上契下、怖广王、恐广群。懊念六道之賊

現種智之額上、戲論五見之恩閉頻婆之臂中。右

手執大智雄釵、一ヒ振テ断結使之命。左手執四棋龍

索、以□縛广怨之倫。足踏磐石、妙レ如高奇海。身出猛

焰、喻迦樓羅吞龍。一ヒ宣如来勅命、三界敢无撻逆スル

者。一時秘密明咒、三世鎮垂加護ス矣。凡无相之相、一々莫

不表甚深法門。无身之相之、事々悉莫不秘密之莊

嚴。或称怨怒之大士、故十广八广之軍靡旗、退散。或

号行者之奴僕、故一称一持之人如影、随遂。一当知、是

本文、前行に追い込み
儉は瑜の誤り

契は喫または齧の誤り

□、難読。接の誤写か

相の下の之、衍か

遂は逐の誤り

大日如来之主ナリ、猶載行者於頭上。童子即是一切諸

仏之尊ナリ、恭受殘食於持者。加之五智満ハ、一智、四方

仏併莫不大日一鉢。五尊令一尊、五明王皆是莫。』42ウ

不備无動為本尊。若不修此法者、不伝三密家業。

若不帰此尊者、全ク非金剛仏子。況又其眷属者、或

二童子ハ、頭三部ノ不ト相離。或八大童子、表四智四行

之相従。梵尺四王モ常随従シ、大五明王龍天善神

莫不金剛属。誰入秘宗者、不将念此尊畢。

「奉仕修行者猶如薄伽梵」云事、閉一目は其意也。天竺ヲ作法

者、成人奴婢者閉一目也。「眇目坐陋无威德者」ト云ル、是也。

又一身上ニ現六道形也。火炎表地獄。鬼形表鬼道。伽楼

羅炎表畜生也。絹索智劍ハ表修羅道。童子ハ表人

道。天冠瓔珞等ハ表天道。利生也。

48 ○明王

今此明王ハ三界

摂領之尊、降广制敵之仏也。本地極高、唱正覚於久

遠。垂迹良広、混和光法界。如或経云、「本鉢ルサナ、久遠」43オ

正覚、法身遍法界、智恵同虚空」云。文心者、此不動明

令は合の誤り

畢の下、二字分空白

瓔珞、底本玉玉

標題・本文、前行に追い込み

正の上、成脱か
云の左、丁の如き字あり

王是大日如来教令輪身之利生方便化道色身也。忝

動法性難動山、而入生死難入之海。外示暴惡忿怒之

形、内垂平等一子先哀。八識波靜シテ、四点之印明々ナリ。五住

雲霧暗テ、三身之月灑々タリ。无動ニ而有動。々々入三有之

郷、未來導四生之族。執智恵之利劍、伏難伏之者。化

三昧之全索、調難調之輩。坐磐石上、表大定徳。身ヨリ出火炎、

表大智徳。閉善惡。无相与現相、々々遍世界海。无声而有

声、々々及塵刹土。暴惡腎内常含无極之悲、忿怒眼底

鎮裏ツツミ大悲之涙ナシ。収柔和忍辱之姿、摧三障四广之軍。

隱紫金無比之膚、防七厄九横之怨。如或経云、「一時秘

密咒、生々而加護、令証大菩提、故我稽首礼」云。文ノ心』43ウ

者、若聞明王名字、若誦秘密咒乃至一遍者、生々世々常隨加

護、不離其人。恭敬奉事、猶如仏相。若欲見十方浄土、頂載

其人二至諸仏土一、令得見之。故経云、「欲見諸仏土、明王忽出

現、頂載於行之、能令得見之。何況求余事、随持得成就、不墮四

惡趣、決定成菩提」。夫流転雖久、不可過五道。祈願雖多、其但

限三世。然為現世安穩、以生々加護之説、為後生善処、以不墮

惡趣之文。彼蚊虻附□翼者、自至於万里之外。巡夫具輪王者、与

上の動、難説

々の前後、脱あるか

全は金の誤りか

閉善惡の前後、脱あるか

欲見の下、諸仏土を消す

□、斤+鳥に作る。鴻の誤りか
翼は翼の誤り

廻於四城之境。法力不空、勝利何疑。此明王、三密四門之利益无妨

无尋、四倒三毒之破滅无滯シヤカコイ无レ雍。虫ヲ矜羯羅等之二童子□

擁衛於昼夜、伊舍那等之十眷属頭加護於晨昏。現世当

生之悲願言語斷、土出世間之利物莫大哉。某抽三業清淨

之誠、頭大聖忿怒之形像、運一心不乱之志、遂供養讚歎』44オ

之本懷。且望眼前之勝利、且折身後之引撰。現当念染、必

賜冥助。今後馮ミ原シ、定蒙利益一矣。

49 ○大威德尺

夫大威德明王者、此レ阿弥陀如来ノ教領輪

身ト申ス。悪レ降伏ノ、極ノ大忿怒ノ故也。内ニハ秘シテ慈悲之鉢、頭

外ニハ忿怒之形。誓ハ二世大威徳ト申テ、現世モ後生モ助給フ明王也。

形ハ青黒忿怒ノ大鬼王、心ハ一子ノ大慈悲之心也。即、六頭六面六

臂六足之相好也。是則、表ス利益安樂スル六道衆生ヲ之相上矣。

50 ○毘沙門天

次奉尺多門天王者、往古ノ如来法身大士。為

仏法護持ニ示多門形ヲ、現悪レ降伏カ鉢、私ヒ天广波旬之

難ヲ給。依之娑婆世界之間南閻浮提之内、天广悪鬼見此

天王怖畏、不致恼乱。故法花経陀羅尼品中ニハ、「令百由旬

虫(？)、不審

染は或いは深の誤りか

原は厚の誤り

本文、前行に追い込み

臂は臂の誤り

本文、前行に追い込み

娑婆、底本女

内、无諸衰患」云。况福德智惠高官荣花之望、寿命」44ウ

長遠□養如意願、此毘沙門天王十種誓願漏コト无。合

戰勝負之道、成弓箭兵林。国土豊饒故、如意珠王身ト

現給。偏此多門天王ノ利生也云。

51 ○毘沙門釈

次毘沙門天王者、仏法護持大将、衆生利益天等也。一代五時

説教、毎教發護持之誓。秘密曼荼之海会、毎会「為潜

衛之時。是以雖濁世「仏法尚ラ弘ル、雖末代利益不空。持念

窓前七宝忽現、帰依床頭衆難永退。或経云説得十種

福、或経ニハ明十種勝利。凡人法護持三徳梵斤難記者

歎。所仰者仏法護持之誓願、所馮攘災招福之

利益也。伏乞、多門天王生々世々擁護、在々処々教化、令

我必得五縁具足修行正法、孝養父母一給へ。

52 ○毘沙門尺

夫毘沙門天王者、梵語也。此ニハ多門ト云。此即利益衆生ノ慈」45オ

門広カ故ニ、多門ト云也。凡此天者、本有寂光之内ニハ性々トシテ離迷悟之

儀、真如法性之潤ニハ法々トシテ无動出相、无来无去ノ相本ヨリ顯出

没去来躰、不動不散ノ性中ヨリ和垂迹応同影、護持仏法ノ大

合は合の誤り

標題、前行に追い込み

云は二ハの誤りか

斤は或いは行の誤りか

行末の之の下、約二字分空白

標題、前行に追い込み

將ト示シテ尺尊所設教法ヲマホリ、人民加護兵士ト現シテ四尸三障

天藥ヲハラウ。ト居於須弥北面、施々德於南浮人法御ス。左ノ

手ニ捧宝塔給ヘルハ、仏法護持ノ志ノイチシルキコトヲ顯ス。右手ニ如意

宝珠捧ヲ奉リ給ヘルハ、衆生願滿ノ新ナルコト表ス。但雖可流通尺尊

教法、天广波旬伺隙求矩、豈輒弘通。若仏法不弘者、争

致現世祈禱、祈後生菩提。現世ヲ不祈者更出離生死之期モ

无シテ、穢惡ノ世界マヌモリタル我等衆生マテ候ヘキニ、護持仏法之

多門大天、昼夜ニ弘障恒時ニ加守護給カ故ニ、三國四衣ノ

伝燈ノ大師等如思、仏法ヲヒロメ、南北二京ノ僧都頭密修』45ウ

学者モ、任心聖教ヲ習テ自利々他ノ行願ヲ満足シ、伝法末法人倫ヲ

哀愍シ玉フ。就中弘法不弘者、争カ弁黑白知因果、孝養

父母奉仕師長。然ニ毘沙門ノ誓願ニ、我每天ノ三時ニ我福ヲ

ネカハ、決定シテ令得タマヘリ。又念我人口ヨリ入テ胸ネノ間ニ住テ、如

影隨形且クモタチハナレスシテ教化之、口ヨリ出テ、金色仏身ヲ

現シテ教化之、成就菩提大願。現在孝子ハ此天ノ大福德アツカテ、

須達長者徳ト等シクシテ千秋万歳算ヲタモチ給ハムコト、更无

疑者ナリ。次炎广王ト者十王中惣官、冥道ノ間ノ大将也。炎羅者

西天印土ノ梵語也。東域秦地ノ漢語ニハ、息諍王ト申ス。一切衆生ノ

トはトの誤りか

上のニ、ノ?に重ね書き

捧は棒の誤り

矩に付訓して短と訂すか

マは共にニの誤りか
候、字体攸

弘法は或いは仏法の誤りか

ハの下、脱か。得の下、脱あるか
胸、月を下にも書く

大の上、天を消す

善悪ノ業因受報ノ好醜ヲ吉々コトハリテ、各々ノアラソヒヲヤメ給也。
サレハ今ノ孝養ノ善根モ、定テ浄ハリノ鏡ノ面ニ浮頭、俱生神ノ札タノ
上ニ注サレ数ヲ給ラムトコソ覚候。

53 ○弘法大師伝記』46オ

弘法大師、諱空海。讃州人。少師勸操、卅一入唐、遂遇青
龍寺惠果。和尚令咲歎、喜曰、「我先汝知来、相待久也。」
无人付法」。即授两部大法、慇懃付囑曰、「此沙門非是凡

徒、第三地菩薩也」。大同二年帰朝、於清涼殿、為立真言
即身成仏之義、結印觀念、顔色金、膚放黄金光。

一人退座、万人低首。承和二年入定、遥待慈尊下生。年
六十二。

54 ○伝教大師伝記

伝教大師、諱最澄。江州人。幼

従行表出家。七歳学越等輩。廿受具足戒。延暦四年、

深観无常、又根澆遊心於大乘、遁身於山林。形ヲ攀睿

峯、結草ニ為庵。四十六入唐。初刻天台山、謁道遂和尚。次

登台嶺、值行滿大徳。後至龍興寺、遇順曉阿闍梨、抄

写天台真言教文、都得三百五十卷。延暦二十四年帰朝、』46ウ

標題、前行に追い込み

勸は勸の誤り

今は含の誤りか
歎、難に重ね書き(歎のつもりか)

標題・本文、前行に追い込み

刻は到の誤り
遂は遂の誤り

写、字形不整

即令有勅「流伝於土」。自此台教大々行我国。
弘仁十三年、帰寂於中堂院。年五十六。

55 ○慈惠大師伝記

慈惠大師、諱良源。江州人。幻投理仙^ヲ出家。後事尊

意和尚。岐嶷之性、同一解十。智辨幽ノ深シテ玄之又玄也。天祿

二年、於楞嚴院始行布薩。大師登高座、唱梵網二字。每

唱一字、光從口出。額顔赫^トシテ保。大衆欽仰、以為神異焉。永

觀三年、合掌向西、念仏而逝。春秋七十三。

56 ○慈覺大師伝記

慈覺大師、諱円仁。下邳人。幻從澄公出家。四十五入唐、遂

巡礼五台山。碩德皆疑、「客是文殊歟」。歳及一紀、將還本

朝、会昌天子忽滅仏法。時唐人僉曰、「我国仏法、既以断

滅。令随和尚東去而已。若後有求法者、当向日本国」。

承和十四年帰朝。所得顕密念誦教法経論章疏、又兩^才 47

部曼荼羅諸尊壇様等、都慮八百余卷。凡仏法東

流、半是大師之力也。貞観六年、念仏而終。年七十一。

57 ○天台大師伝記

天台智者大師、諱智顛。荆劬人。幼從

々は二の誤りか
国の下、約五分空白

標題、前行に追い込み

人の下、幼を消す
事の下、首を消す

同は聞の誤りか

標題、前行に追い込み

幻は幼の誤り

慮は慮の誤り

也の下、二分空白

本文、前行に追い込み

法緒^二出家。遂謁大蘇山思禪師。思初見咲曰、「昔在靈山^一同

行^解。形法花。宿縁所追、今復来^一矣。後諦浄名経、修見^二三道宝階

從空^一而下、阿闍士^一会儼然而現。數十梵僧手擎香

炬、達嶺^二三匝、讚曰、「善哉智顛、玄悟仏意、吾来影向」。終告

曰、「吾從生来坐向西方、念弥陀仏」。開皇十七年順寂。春秋六十七。

58 ○聖德太子事

夫聖德太子者、用明天皇之太子、推

古天皇之儲君、欽明天皇之孫。昔在漢土衡山^ニ修行^シ時之、達戸

勸曰、「誕生海東、宣揚^二法^一」文。百濟国ノ日羅拜云、「敬礼救世

観音^レ世 伝燈東方粟散王」。此則、我朝^ニ聞観音^レ」47ウ

名号^一」最初ナリ。

59 ○聖德太子伝記

聖德太子、豊日

天皇第二子也。身體尤香、或眉間放光。推古天皇立為太

子、万機悉委。天皇請太子、令講勝慢經、蓮花忽落。

花長三尺。皇大尊崇、建立精舎。今橘寺是ナリ。太子終

曰、「吾昔住南岳、經數十身、修行仏道。今為小国之儲君、

漸弘一乘之妙義。日域化縁亦已尽、還帰西方我浄土」。

修は俛の誤りか

達嶺は逸顛の誤り

本文、前行に追い込み

標題・本文、前行に追い込み

皇の下、諸を消す
慢は鬘の誤り

60 ○善導和尚伝記

廬山繼祖善導和尚、泗苧

人。初看觀經、悲喜災。歎曰、「唯此觀門ノミ速超生死。吾得

之」矣。於是竹馬勒精苦ナルコト、若^{コトシカ}救頭然^ヲ。三十余年、未暫

睡眠。或問導曰、「念仏生浄土^ニ否」。答云、「如汝所念、遂汝所願」。

对^ヘ已念仏スルニ、光明化仏從其出。永隆二年終時、高宗皇

帝賜寺額、為光明焉。

』 48オ

仏釈集

乍悪筆如本写申候後見のかた^ク引字

一 反御廻向頼存候

高野山往生院観音院求之^ル深泉石

今ハ 隆誉之

』 48ウ

本文、前行に追い込み
廬は廬の誤り

災(異体)は文の誤りか

竹馬勒は篤勤の誤り

其の下、口脱か

焉の下、空白

今ハ隆誉之、別筆

(2才)

大目 七八

大目如來者非青黃赤白也無長短方圓之狀骨身之
 心三寶出靜保正不也仍常樂我淨故成赤細骨侯之
 取不見非認法勤觀之身不取權實半簡之教非通類
 代現之教不現十亦法身餘餘亦常往不忌諱理佛惟不
 變真如正軌也故至善法性之自願上元才一上生元
 去要來之日光中物在蒙心鉢狀微密密故中成三密
 須達之教法顯教意非認法勤觀之化主也大目通聖
 三如來元亦不至之理性大八日夜為利有情之時通
 大目如來人伊勢國住人樂部大目如來人學師用云
 大目如來者秘密之教之而部之中甚也凡會四堂聖聖
 佛心不六日之現現贊音名摩訶思盧遮那翻名寂高

(48ウ)

佛教集

作念為念字ノ心之
 一太也也也也也

高野山往生院故言院來之
 隆蒼之

(16ウ・17才)

設哉得佛十方安生監本斯未除十方眾生處盡
 不往生者佛壽命不可成救世稱念至十念司攝之
 不捨不救至十念凡支濟受之元前淨玉珠勝易往
 佛身廣大易觀尺逝一代救代如妻遇了赫勒當未
 下生被送難期今當一佛中同若云亦除悲願者
 未法九丈馮何出離執薄福群類誰力誰生死
 并故一切善屋願行以善賢天珠為翅樓為靈鏡
 然善賢願專願性生極樂願云
 願形臨欲命終時亦具可謂之又救行者能出三
 界大苦海中拔濟眾生令得出離可得往生欲
 何諸佛佛授不世身云殊願云願我命終時
 盡除諸障身面見所諸佛性生安樂國云

二願願文一回元異故三國相傳四安一瑞以亦改焉
 尊以念佛為修行趣向三業不修背欣九品往生依已
 祥定如法聖靈一生命佛承辦百方及救護許救後
 御出元忌御受每月通元一托臨終御本尊性
 造修之御首三天逆攝之懷定奉見願目御群御欲
 今又中區四十九日之間每日相用眼供奉安樂以茅
 御飯保上品性生文不可製者致以上御佛功德
 又所亦他別願人吏蘇陸別功德能者四八願也
 發此大願終根元可申同受供也昔依安世世界
 散提嵐國申時大王御上念王申仰道心
 發生死元帝也思每安直取今生樂天上トモカノ
 下トアリ又已後生并コソ大御事一七斤為佛道

解題

右に翻刻した『仏釈集』について、簡単な解説を行っておく。

当該本は平成五年秋頃、岡山県井原市にある古義真言宗の金剛福寺の聖教類がまとまって市場に出た内の一冊である（今架蔵）。同寺の蔵本には多く「備中国／紫雲山／金剛福寺」や「備中後／月金剛／福寺蔵」の蔵印記（或いは「紫雲山金剛福寺蔵書」等の文字を印刷したラベル）が見られるが、当該本にはそれらがなく、ただ後補表紙に「金剛福寺蔵」と記されるのみである。しかし他の同寺旧蔵本と同じ時期に市場に現れ、古書肆の目録にもそれらと並べて掲載されていたこと、当該本を写した深泉が「**㊦**ノ深泉」「**㊦**中ジンセン」と署名して備中の住と考えられること、等に照らして、備中金剛福寺の旧蔵であることは疑いを容れないと思われる。以下、書誌・伝来・内容・成立・依拠資料・資料的価値などにつき、概略の説明を加える。

一 底本の書誌

写本、袋綴一冊（231×174㎜）。表紙は薄茶色のボール紙で、左肩に「仏釈集」、右袖に「金剛福寺蔵」と墨書（本文と別筆）。表紙を開けた最初の丁の左肩に「仏釈集」と記し、下方に右から「**㊦**中ジンセン」「**□**（玄か）音」「今ハ隆誉之」「空政（花押）」と、代々の所持者の署名がある。この点および汚れ具合から見て、この丁は本文共紙の原表紙と推測される。現在の表紙（裏表紙も同質）は、明治頃に加えた覆い表紙であろう。なお元の裏表紙は失われたようである。料紙は楮紙。紙数は原表紙を含め49丁（遊紙なし）。江戸前期頃の写本と思われる。最終丁裏に、「乍悪筆如本写申候後見のかたく**㊦**字一反御廻向頼存候／**㊦**深泉**㊦**」（**A**）、「高野山往生院観音院求之」（**B**）の奥書がある。

深泉の署名はBの真下に続く形になっているが、墨色から推すとむしろAの書写識語と同時に書かれたらしく、Bは後から書き入れられたようである。Bは入手識語のようでもあるが、Aとの間に年代の差を認め難く、またBの文字は本文の文字と同筆と見做されるので、これは親本が高野山往生院谷の観音院にあったことを表しているのであろう。要するにAとBは一連の識語で、共に深泉の記したものと考えられる。なお原表紙の「中ジンセン」の署名も同人のものであろう。恐らく深泉は金剛福寺の僧で、高野山で修学していた折に本書を書写して本寺に携え帰り、そのまま同寺内で伝領されていたものと推定される。因みに観音院は行人方の院家で、元禄六年に廃された（『紀伊国統風土記』）。このことから、底本の書写年代は自らそれ以前に限定されよう。

なお途中17ウ5行目から18ウ末行までは、他の部分と書風をやや異にする。或いはこのみ別筆か。それと11オウの補筆文字を除けば、本文には書き入れ等も含めてほかに別筆の箇所は見当らない。料紙は若干虫損を被っており、ままた判読困難な箇所がある。

二 内容と構成

底本には巻頭1オウに目録があるが、本文の内容や順序と必ずしも一致しない点があるので、改めて各編の標題を仮に付した通し番号と共に一覧しておく（題下の注記は省いた）。

- | | | | | | | | |
|------------|---------------|-------------|--------|---------|--------|---------|---|
| 1 大日 | 2 大日如来尺 | 3 大日釈第五十 | 4 卅七尊事 | 5 薬師 | 6 又薬師 | 7 又薬師 | 8 |
| 薬師仏尺 | 9 薬師仏尺 | 10 日光（文章なし） | 11 弥陀尺 | 12 阿弥陀 | 13 阿弥陀 | 14 阿弥陀尺 | |
| 15 又阿弥陀別願尺 | 16 信濃国善光寺阿弥陀事 | 17 弥陀尺 | 18 釈迦 | 19 又釈迦尺 | 20 釈迦尺 | | |
| 21 舍利事 | 22 舍利神反利益事 | 23 舍利供養功德事 | | | | | |

24	弥勒	25	弥勒尺	26	文殊	27	又文殊釈	28	普賢	29	三宮本地事	30	普賢菩薩尺	31	観	
音	32	又観音尺	33	又観音尺	34	六観音并千手観音尺	35	十一面観音	36	如意輪	37	如意輪				
尺	38	勢至	39	勢至尺	40	勢至尺	41	虚空蔵	42	亦虚空蔵	43	地藏	44	又地藏	45	又
地藏																

46	愛染明王尺	47	不動尊尺	48	明王	49	大威徳尺	
50	毘沙門天	51	毘沙門釈	52	毘沙門尺			
53	弘法大師伝記	54	伝教大師伝記	55	慈恵大師伝記	56	慈覚大師伝記	
徳太子事	59	聖徳太子伝記	60	善導和尚伝記				
					57	天台大師伝記	58	聖

以上、全て六十編となる。ただし10日光は標題のみで詞章が欠けており、實質は五十九編である。また22舍利神反利益事は、底本の形態からは前項の続きとも解し得るが、一応独立の項目と見做した。

これを巻頭の目録と対照すると、五編ある薬師釈が目録には四題しかなく（8・9の薬師仏釈の一方を脱したか）、11・14の阿弥陀釈も三題しか挙っていない。反対に15又阿弥陀別願尺に相当する「亦弥陀別願事」の次に「又弥陀事」が加わっているが、これは恐らく17に当り、16と順序を転倒したらしい。「舍利事」は22・23をも含めているのである。29三宮本地事を挙げていないのは、標題に○を打っていないことと併せると、独立の項目と見ていなかったようにも受け取れるが、内容や文体からは前項と区別して扱うのが妥当と思われる。一方「日光世言」の次に、本文中に標題すら書かれていない「月光世言」があるのは訝しい。日光・月光両菩薩が目録にはあつて釈が見えないことについては、適当な資料があれば追補する予定で、薬師の付属の位置に編者が項目名（標題）だけ入れておいたか、または日光・月光両菩薩とも原本にはあつたが、転写の過程で前者の標題を除いて省かれ、目録にのみ残ったかの、

いずれかの事情が考えられる。後者に関して言えば、省略するのならば本文中の「日光」の標題も不要だし、その後
に空白を置く必要もない筈で、その点やや可能性に乏しいように思われる。しかし例えば17末尾の空白行も、引用文
を省略した痕跡らしく、それが転写の際のものであれば、今の場合も同様に解することも可能であろう。どちらが妥
当か決め難く、ここでは両様の解釈を示すに止める（本文中に「月光」の標題が欠けているのは、本来とも書写者の省
略とも考え得る）。なお目録で尊名に注記された日付は、それぞれの縁日を示しているようである。

さて前掲の一覧からも分るように、本書は仏・菩薩・明王・天および祖師という一応は整った形態に組織されてい
る（一覧では、それぞれの部ごとに改行しておいた）。仏部には、大日・薬師・阿弥陀・釈迦の四仏釈を収める。こ
の内4冊七尊事は大日の付属、21舍利事以下三編は釈迦の付属であろう（ほかに標題のみの10日光が薬師に付く）。
菩薩部は、弥勒・文殊・普賢・観音・勢至・虚空蔵・地藏の釈計二十二編から成る。観音が七編とやや多いが、その
後半は千手・十一面・如意輪の釈である。明王部は愛染・不動（48明王も）・大威徳の四編、天部は毘沙門釈のみ三
編。末尾の祖師部には、弘法・伝教・慈恵・慈覚・天台の諸大師と聖徳太子・善導和尚の略伝を収めている。主とし
て諸仏菩薩の功德や縁起等を説いた文章を集めている所から、『仏釈集』と名付けたものと思われる。

ここで『仏釈集』の構成について考えるに先立ち、本書と『釈門秘論』ないし『転法輪鈔』との間に共通の文章が
数編含まれることに触れておきたい。具体的には、その一に本書の14阿弥陀尺は、題下に「上西門院／御葬家依人詠
注澄憲」と澄憲作の旨が記されているが、これは金沢文庫本『釈門秘論』第五の第二帖所収の、「同（阿弥陀）如来
因行果徳釈」に当ると思われる。ただし現在金沢文庫で閲覧できる『釈門秘論』には同帖は見られないが、かつて榎
田良洪氏が紹介された記事によって確認が可能である（六を参照）。更に『転法輪抄目録』の第八箱「自草」の阿弥
陀の部に、「一帖阿弥陀尺因果功徳」上西門院喪家人詠」と見える「因果功徳」の釈も、恐らく同一の文章だったかと推測される。

その二に、本書の2大日如来尺は、密教関係の仏釈を集めた『釈門秘論』第十三の第一帖に「大日如来別尺」と肩書して収められた文章と同文である(ただし2末尾の「首戴…」以下の五行を除く)。その三に、47不動尊尺は、同じく第十三の第三帖に収められた四編の不動明王釈の最初のものと同じとする(ただしこの場合も、47末尾の五行は彼にない)。なお、後の二者も『転法輪鈔』に収められていた可能性は少なくないが、同書の現存部分には含まれず、目錄からも確認できない。このほかにも本書には澄憲作かと想像されるものがいくつかあるが、それについては後述に譲る。

右に述べた所から、『仏釈集』と『釈門秘論』『転法輪鈔』(特に前者と密接な関係にある第八箱「自草」)との間には何らかの資料的繋がりが推定されるのであるが、そのことを踏まえて、ここで双方の構成の類似に目を向けてみたい。『釈門秘論』は、金沢文庫本によれば第一〜十三が諸仏釈、第十四〜廿二が諸経釈、第廿三〜廿七が諸仏事釈という構成になっている(ほかに巻次不明の仁和寺本一帖が現存するが、これは仏事釈の一部らしい)。その内、諸仏釈の内容を示せば次の如くである(榎田良洪氏「唱導と釈門秘論」『印度学仏教学研究』第一巻一号、昭27・7)に掲載の一覧を基に、現在閲覧可能なものを参照して作成した。――は榎田氏の一覧に記載のない分。「」は稿者の注記。

○一 釈迦釈〔主として釈迦八相の釈らしい〕

○二 釈迦釈

○三 釈迦釈〔全七帖で、第七帖は報恩講式と舍利讚〕

四 ――〔釈迦釈または阿弥陀釈か。前者とすれば舍利釈の可能性あり。或いは別の仏釈か〕

○五 阿弥陀釈

○六 阿弥陀釈

○七 薬師釈

○八 観音釈〔勢至釈もあつたか〕

○九 普賢釈〔二帖の内第一帖が現存。或いは第二帖が文殊釈だったか〕

十 ——〔地藏・弥勒などの諸菩薩釈か〕

十一 ——〔諸天釈か、或いは諸菩薩釈の続きか〕

○十二 大師等〔天台大師・高野大師・伝教大師・慈恵大僧正の各釈および表白〕

○十三 大日釈・不動釈〔大日如来四種法身・阿弥陀仏・法花曼陀羅・阿弥陀五仏・不動明王・法花経并開結経等・一切

経略釈・真言教流伝時節・千手陀羅尼の各釈。〕〔転法輪抄目録〕第八箱で「秘教」に相当する内容〕

一方、『転法輪抄目録』第八箱の内容も、「一結」として纏められた分ごとに列挙してみる（適宜〔 〕内に内容について注記）。

○尺迦

○阿弥陀〔三尊釈を含む〕

○薬師〔三尊釈を含む〕

雑像

法花

具経

五部大乘

大般若

仁王經

諸經

一切經尺

○諸菩薩〔地藏・觀音・勢至・普賢・文殊・弥勒の各釈〕

○大師等〔十六羅漢・十大弟子・天台大師・漢土七大師・導師和上・慈覺大師・伝教大師・智証大師・慈惠大師・弘法大

師・聖德太子・行基菩薩の各釈〕

○秘教〔阿界・法花曼陀羅・愛染王・不動・烏瑟沙尸・普賢延命副寿命經・千手陀羅尼經・勝陀羅・宝篋印・光明真言・大

日經息障品・法花真言門・一切經略尺・真言教流伝の各釈、ほか三帖〕

○天〔護世八天・四天・十六善神・毘沙門・堅牢地神・炎尸天・執金剛神・訶梨帶母の各釈〕

堂塔

逆修

雑々

即ち『転法輪抄目録』第八箱では、『釈門秘論』で諸仏釈の後半に位置する菩薩・天（推測）・大師・秘教の釈が、諸経釈と仏事釈の間に置かれていることになる。いずれにしても、○を打つたものが『仏釈集』と共通する尊名を含む部である。これによれば、『仏釈集』の構成は全体的に『釈門秘論』の諸仏釈のそれに近く、また諸経釈の部分を飛ばして考えれば、『転法輪抄目録』第八箱の配列とも類似することが分る。ただし個々の仏・菩薩等のそれぞれの部の中での配列はかなり異なるほか、重要な相違点として、大日如来釈が秘教部から離れて仏部の冒頭に置かれていることが指摘されるが、これについては後に取り上げる。

上述のように『仏釈集』の内『釈門秘鑰』（および『転法輪鈔』）と共通するものが少なくとも三編あることからは、本書がそれら自体ではなくとも、それらに基づいた何らかの資料を参照している蓋然性は高いと思われる（項目が多く重なる割に一致する文章が少ないことからは、直接には見ていないと考えるべきか）。とすると構成についても、間接的にせよ両書から学んでいることが想像されよう。もつとも構成上の影響関係については、諸仏を配列すれば自然似たような形になるとも言えるので、積極的な主張はしにくいけれども、例えば祖師の伝を仏釈の中に含めている点などは、或いはその現れとも解されるのではなからうか。

三 成立と編纂の問題

次に、『仏釈集』の成立について考えてみたい。前節で本書と『釈門秘鑰』等の構成を比較したが、その際顯著な相違点として、仏部において大日釈を冒頭に置いていることが注目された。これに祖師の部で弘法大師の伝記を最初に配列していることと、底本の親本が高野山にあったことを考え併せると、本書は真言宗の僧によって編まれたものかという推定が導かれる。ただし高野山で成立したかどうかまでは確かめられないが、ここで注意されるのは、底本の親本が高野山の観音院に蔵されていた点である。観音院については、寛文十二年の序を持つ『高野山通念集』に、次のような記載がある。

開基の先徳誰といふこと。未詳^{つまひらかならず}。本堂の御本尊阿弥陀如来并観音勢至。護摩堂の御本尊不動明王并二童子

弘法大師
御作 中古 後円融院の御時。円俊僧都此地の狭隘なるを嫌ひ。境内を広めしに。乾の角にあたりて。大盤石あり。

此石を穿見るに。千手大士巍々としてまします。僧都奇異のおもひをなし。持仏堂に安置し給ふ。むかしより院の号をかくいふ事。寔に故ある勝藍也。則彼石を観音石と名づけて貴賤の渴仰おぼろけならず。（下略）

つまり本尊は阿弥陀如来であったこと、また往古に境内から千手観音を彫った大石を掘り出したことがあり、それが貴賤の信仰を集めていたことを伝えている。右によれば「観音院」の寺号は昔からのもので、その奇瑞に由来するわけではないが、しかしそれ以来千手観音の靈石が観音院の名を高めたことは窺える。

翻つて『仏釈集』の内容を見るに、仏部において阿弥陀釈が六編（16を加えれば七編）と最も多く、また菩薩部において他はすべて二〜三編なのに観音釈のみ七編を占めているのが目に付く。これは、或いは本書の原本が観音院において成立したことを示唆するとも解されよう。もつともその想定に対しては、薬師仏釈も五編収められているし、何よりも阿弥陀や観音は一般性の強い仏であるから、自然に資料が多く集つたに過ぎないとの反論も成り立つ（同じ理由で、明王の内不動釈のみ二編あることを、護摩堂の本尊と結び付けることも難しいであろう）。故に、ここでは一つの可能性として触れるに止めておく。

一方、本書が真言僧の編纂に係るといふ先の推定に拘わらず、収録された個々の文章を検すると、天台宗の学僧の執筆を思わせる文辞が散見する。具体的には、次のようなものがある。例えば3で、「秘密宗」で言う法界体性智に阿の二字があるとした所で、「即阿ハ胎藏界ノ教主、五智徳ヲ具セリ。即従因ノ向果ニ義也。：依法花ノ者、迹門ノ意也」と、特に『法華経』に言及し、阿字―胎藏界大日―法華経迹門を同一視する見解を示している。また6では、「カ、レハ、仏モヲ造ヲ事候イキ。祇園精舎ニシテ：我國ニハ天台ノ峯ニ、伝教大師聖靈ノ刻薬師像ノ給ヘリ」と、伝教大師が延暦寺の本尊薬師像を彫刻したことを釈尊の例と並べて特記しており、17では弥陀とその浄土が報身報土か応身応土かを論じて、「サレハ善導モ同ク報仏報土ト尺給仏ヲ、天台ハ応身応土ト尺給ルヲ、從浄土宗无被云事ナリ被不審候ヘトモ、真実ニ応身応土ノ様、現証ガ多候」と、天台大師の解釈を支持している。また29は、山王七社の一つである三宮の本地に言及していることから作者の素性は自ずと絞られるが、文中でも懺悔滅罪について「天台十疑中間答」（智顛

説『浄土十疑論』第八疑)を引いて説いている。ほかに5の「況三或(惑)病ハ、経塵劫、不(レ)書(尽)。一心三観ノ業ヲ服ハ、立処ニ差ヌ」や、42の「此菩薩名号、即空仮中三諦備タリケルナリ。所謂虚空者表空諦…藏者表仮諦…菩薩者表中道」(41にも同趣旨の文あり)のように、一心三観・空仮中三諦といった天台宗の教理の基本語彙を用いて仏菩薩の機能を説く例が見られる。また所収項目自体に関しても、上述の通り2・14・47の各編は澄憲作の仏釈を引いたものであり、祖師の部で天台宗の大師を伝教・慈恵・慈覚そして天台智顛と四人まで挙げていることなど、内容的にはむしろ天台宗色を強く示す部分が目につくのである。

右の内、澄憲の文章を引いている点については、澄憲の唱導文は宗派を超えて受容された事実が確認されるので、編者を真言僧かとした推定と必ずしも矛盾する要素ではない。しかし、先に編者推定の一つの拠り所とした仏部の配列に関しては、仏部は法身―報身―応身の順に配列されており、大日は法身仏ゆえに当然最初に置かれたに過ぎないという解釈も成立し得る。逆に本書所収の各編自体には、真言宗の僧の手になることを積極的に示すほどの徴証は特に見出せないようである(実際には、何編かは真言僧の書いたものと思うが)。この点からは、極端な場合弘法大師を祖師の初めに置いたことだけが編者の作為で、元来は天台宗で作られた書物かという推測すら不可能ではない。少なくとも、『仏釈集』が編纂に当って天台系の資料に多く依拠していることは確実と思われる。

次に本書の成立年代に関しては、撰者名などの直接の徴証がないため、他の方面から推定せざるを得ない。所収の文章の内、澄憲作と判明するもの(恐らくそれが最も古いであろう)が数編あるが、その他は今の所成立の手掛りがなく、稀に見られる具体的な施主名からも割り出しが困難である。ただし、底本の書写年代から推して本書が近世初期以前の成立であることはほぼ確実で、しかも時折不可解な文字や意味不明の文の混る所から見て、原本がさほど近い時代になったとも考えにくい。底本は恐らく室町時代以前の原本から転写を重ねたものと思われ、即ち本書自体も、

中世に編まれたものと推測する。ただしその場合でも、下限をどの辺りに置くかは不明であり、今は漠然と室町時代の成立かと想像しておくが、確信があるわけではない。

なお本書の編纂の目的について一言すれば、本書が基にした資料は、次節で述べるように恐らく唱導説法の際の備忘・参考に供するべく書き留められたものが多いと思われるが、本書自体は唱導の参考用という実用目的とは離れて、諸尊の機能を手早く知るために編まれたとも解される。その点は截然と割り切ることが難しいけれども、いずれにしても天部において毘沙門釈のみを三編収めているという偏りや、日光・月光両菩薩の釈が欠けていること（これは転写過程の省略とも考え得るが）の意味は、その際問題にされる必要があるであろう。

四 依拠資料の性格

次に、『仏釈集』の編纂に当って用いられた資料の性格について触れておく。

本書を通覧すると、実際の法会の場合で用いられた（または、それを予期して作られた）と思しき仏釈がしばしば収録されていることが目に付く。その端的な徴証として、一つは文中で本尊造立ないし逆修供養の施主や、追善供養の対象に言及していることが挙げられる。前者には2の「故大法主、…衆徳円満衆願満足給歎」、7の「就中御為大法主者…」、15の「就中信心大施主…」「而レハ即大施主并ニ女大施主…」、45の「若尔者、大法主設此善根修シ御サストモ…」などがあり（ほかに6・29）、中には「願ハ当堂本尊生身千手観音、…必僧覚仁守ハクソ（クカ）ミ御セ」（34）、「大法主沙弥円願ノ心願ヲ知見シメ…」（37）、「サレハ大法主沙弥円願…」（42）のように、具体的な施主名の示されているものもある（2の題下に「伊勢国住人兵部」とあるのも、それに准じて考えられる）。後者の例は、3の「今日、幽霊モ…即身成仏無疑」、14の「依亡禪定如（女）院聖霊…」（題下の注から上西門院と知られる）、20の「若尔者、今

日ノ尊靈設ヒ地獄ニ落給^リトモ……」である。また一つは、文中に仏像（立像・繪像）を造頭する旨やその功德が述べられているもので、7の「薬師如来形像一百躰奉摺写供養」、15の「丈六ノ弥陀ヲ造立シ四十八度ノ供養ヲトケ御ス事……」、25の「造立供養志、廻向如此」、31の「何況、語巧匠、顯尊像、遂供養、給ハ、觀音利生無疑」、34の「毎月ニ摺写^シ形像……」、「今日開眼供養ノ六躰千手觀音……」、39の「何況於奉頭形像ノ類者、二親得脱不可有疑事也」、42の「如其今被開眼供養、御ス虚空菩薩モ……」、「而此菩薩因給功德依……」、48の「^某抽三業清淨之誠、顯大聖忿怒之形像、……遂供養讚歎之本懷、……」などに例が見られる（ほかに2・6・14・19にも）。

このほか仏事供養の場との関わりを示す文言として、15の「入來聽聞之尊卑ノ男女……」や、19の「況今日作善^ヲヤ也……」、25の「以今日善无（毛か）之小善」、29の「而今日、七日修懺法被^レ救没後、追福……」、45の「以今日善根、為能化……」、52の「サレハ今ノ孝養ノ善根モ……」などを指摘できる。また2の「乃至法界利益周遍」、37の「乃至有頂无間、无差平等利益セハ」、45の「乃至法界平等利益。敬白」は、説法の閉じめの言葉までが筆録されたものである（15末尾もそれに類する）。

また以上ほど確実な根拠ではないが、「次薬師如来別功德奉尺者……」（7）のように「釈」する旨を謳った文章の場合も、法会における仏釈という想定が可能である。仏菩薩やその功德を「釈」という文言を含むものは十六編に及ぶが、その内3・7・8・18・19・29・31・34・40・42の十編は、如上の施主ないし仏像造頭への言及や、次に述べる「候」の使用など、他の点から仏事供養との結び付きが裏付けられる。するとそれ以外の13・24・35・38・43・50の各編も、やはり法会の場で用いられたか、そのために書かれたものと推測して差し支えなからう。

一方、これらのように具体的な文辞に現れた例とは別に、文体の面から唱導説法との関わりを推測できる場合もある。最も分りやすい徴証は「候」の使用で、特に6・7・9・12・15・17・29・42の諸編に頻出し、口頭語的文体の

印象を強く与えている。ほかに 8・18・20・25・32・40・45・52 にも「候」が使われている。そしてこれらの諸編には、しばしば「…様」、「…様ハ」といった言い回しが見られ、説教の語りの文体の特色を示している(6・12・15・29・32)。また「候」を頻用するものの内で、9・15・29の各編に「ゴン」が集中して用いられていることも注意してよいであろう(52にもあり)。

従って、内容や文体において以上に挙げたような徴証や特色を持たない文章は、唱導の場との繋がりが、それ自体には積極的に認められないものということになる。列挙すれば、1・4・5・11・16・21・22・23・26・27・28・30・33・36・41・44・46・47・49・51、および53〜60の祖師伝の諸編である。標題だけの10を除き五十九編中で二十八編と、編数の上での割合はかなり多く、厳密な意味での仏釈に属さない53以下を外して考えても、五十一編中二十編となる。ただしこの内27・28・30・51の四編には、「仰願大聖文殊垂加被…決定趣善菩提門給へ」(27)、「伏乞、多門天王…令我必得五縁具足…給へ」(51)のように、末尾に本尊への祈願の言葉が添えられており、明瞭ではないものの何かの供養の際に用いられた可能性を考えてよさそうである。また47も、既述の如く『釈門秘論』に見えるもので、ほかにも説法での使用を目的に草された文章が残る十五編の内になお含まれる筈である。とすると、『仏釈集』に収められた仏釈の大半は、何らかの意味で唱導と関わりを持っていたことが推定される。

なお本書の依拠資料には、擬作も含めた導師自身の手控えのほかに、或いは聴者の聞き書きも混っているかも知れないが、明確に指摘することは難しい。可能性があるとすれば、「候」を多用した口頭語文体の諸編の内であろう。

五 資料的価値

以上に記した所を踏まえて、全体的な解説の終りに、『仏釈集』の資料的価値について簡単にまとめておきたい。

前節で述べたように、説法のための手控えの類を多く収録しているらしい点が、『仏釈集』の一つの特色である。仏事法会ではしばしば本尊の功德を説く仏釈がなされた筈だが、それが一書に纏められたものは、安居院の『釈門秘鑰』や『讚仏乗鈔』等を除けばあまり知られていないらしい。本書は成立年代が不明確で位置付けに問題が残るもの、その点で一つの意義があろう。ただし収載資料の性格や質は区々で、澄憲のもののように整序された文体で経論を縦横に引用しつつ教理を説き明かして行く格調高い文章を含む一方、相当に鄙俚な印象を与えるものも混るけれども、概して残りにくい一般向けレベルの説法の口吻を伝える資料として、それら卑俗な例の方が却って貴重と言えようか。中で言えば、6又薬師で「史記ト申文」にありとして無稽な例話を語る所などは、いささか興味の持たれる部分であろう。

また、本書が澄憲作の仏釈を取り入れている点も見逃せない。表白や願文のように故事を織り込み美辞麗句を駆使した文章ではないためか、『釈門秘鑰』所収の澄憲の仏釈が後代の文献に引用・収録された例は従来確認されていないようである。その点で、安居院の唱導文の利用と流伝の一端を物語る資料として多少の価値があろう。そして後に示すように、詞章を金沢文庫本『釈門秘鑰』と比較するとままた異同が認められ、それとは系統を異にするらしく、誤写はやや多いものの対校の材料ともなるであろう。

ところで、『釈門秘鑰』と重なる三編の内二編には澄憲作の注記があるが、他は作者名がなく、『釈門秘鑰』と対照して確認できるものである。本書が『釈門秘鑰』か『転法輪鈔』、もしくはそれらに基づいた何らかの資料を参照していることは先に推測したが、とすれば本書には、ほかに澄憲の仏釈の含まれている可能性が考えられよう。その観点から各編を見て行くと、文体などから推して澄憲作の蓋然性の比較的高いものとして、25 弥勒尺と30 普賢菩薩尺が挙げられる（なお前者には金沢文庫に単独の写本『弥勒尺』が伝存する。後述参照）。また48 明王も、或いはそう

ではないかと思われる。もとより確証はないけれども、今後他の方面から裏付けが得られれば、現在完全な形で伝わっていない『釈門秘鑰』を補うべき資料としての価値が生ずるであろう。その意味で、ここに併せて触れておく。

ほかに本書には、伝承研究の材料となり得る記事も若干見られるが、具体的な検討は別の機会に譲る。

底本は高野山と繋がりを持つ地方の一寺院に伝来したものであり、同種の文献はほかにも存在する筈である。高野山を初め諸寺院を探索すれば、より良質な資料が見出される可能性は十分期待できよう。今後の調査を期したい。

六 各編についての注記

『仏釈集』所収の諸仏釈の内、いくつかを選んで若干の補注を加えておく。

【2大日如来尺】 上述したように、本編は『釈門秘鑰』第十三の第一帖所収「大日如来別尺」と同じである。ただし題下の注記は彼になく、詞章にもまま相違がある。その内、文意に関わるものなど目立つ異同を掲出しておく（数字は本編の行数。なお訓点の相違は原則的に度外視し、本文の漢字のみ掲げた）。

- ①四重—四種 ②翻名最高広眼相如来—翻名仏母亦云一切諸仏眼 ③得日—待日 一切有情善根生長出世事業成就—生長有情善根成就出世事業 ④有情—一切有情 生—生長 ⑤菩提—菩薩 ⑥故名大日也—故如此名也 ⑦更無壞滅—無壞滅 縦—（なし） ⑧胎金両部—胎藏金剛両界 ⑨具—具足 ⑩安然尺—（なし） ⑪一鉢—鉢 ⑫一 以此雖可思也—以此詞深可思之 ⑬金剛界—為金剛界 ⑭天—大 ⑮満住—満月 ⑯凡夫—凡下 可生弁—所生菩薩（合字） 求誓—本誓 ⑰標熾—標熾 ⑱虚空—（なし） ⑲諸仏—法仏 ⑳牙鉢—互鉢 ㉑等^上事^下等^下 ㉒首戴^上……（以下五行なし）

右に挙げた異同には『仏釈集』（の底本）の誤写も少なくないが、稀には『釈門秘鑰』の誤脱を訂し得る例もある。

ところで、本編および『釈門秘鑰』の詞章の大部分は、澄憲が安芸前司義盛の逆修結願供養のために草した仏釈と重複している。同供養の関係資料は、国文学研究資料館本『澄印草等』（『国文学研究資料館紀要』第14号に小峯和明氏が翻刻）に表白・仏釈・経釈を収めているほか、仏釈と表白の写本として金沢文庫本『両界曼陀釈私』および東寺宝菩提院旧蔵本『大日并両界釈』があり、表白のみは『転法輪鈔』密教上にも収載されている。二種の仏釈を比較すると、一部に本編等に独自の詞章もあるが、分量は彼の方が三倍以上とかなり長くなっている。恐らく本編等は、義盛の逆修供養の仏釈から主要部分を抜き出し、若干加筆して成ったものかと推測する。両者の重複する部分は語句も概ね同一で、本編と『釈門秘鑰』の間の異同箇所の一部についてその詞章を示せば、②行目の「翻名……」は「翻名最高頭広眼相如来亦云一切諸仏母亦云一切諸仏眼」とあり、本編と『釈門秘鑰』はそれぞれ前半と後半に対応する形である。また⑥行目の「一切有情……」は「生長有情善業成就出世事業」と、『釈門秘鑰』とほぼ一致している。⑩行目の「安然尺」は『澄印草等』にも「安然尺也」の傍注があるが、ただし『両界曼陀釈私』は注記を欠く（宝菩提院本は未見）。

なお標題下の「伊勢国住人兵部 大日供養尺導師円寂」の注記は『仏釈集』に特有のものであるが、この仏釈が実際に使われた機会と、その時の導師の名を示したものであろうか。本編末尾の「首戴三冬雪……」以下の部分は本来あったとは考え難いが、とすれば、或いはその折に加えられた可能性もあろう。

【14阿弥陀尺】これも上述の如く、『釈門秘鑰』に同じ文章を収めている。ただし現在金沢文庫で閲覧できる分には含まれていないが、かつて櫛田良洪氏が「唱導と釈門秘鑰」において、『釈門秘鑰』所収の阿弥陀釈を通して澄憲の弥陀往生浄土の思想を検証された中に、「澄憲は上西門院の御為めに弥陀の因行果徳を釈して、浄土は殊勝にして、往き易く仏力広大にして亦観じ易い。弥陀^{ミツト}当来^{トウライ}の下生を待つて遠くを期し難く、今は二仏の中間に當つて若し弥陀の誓

願なくば末法の凡夫何によつて出離し、誰の力によつてか生死を離れん、弥陀独り極楽世界に往生せしむるもので三國相ひ伝へて四衆一帰し、弥陀を以つて本尊とする、念仏を以つて所行とすると云ふ事を繰り返へし説いてゐる」と紹介されたのが本編末部(16ウ3行目以下)の内容と一致していることにより、それが確認される。そして櫛田氏の言及された文章は、諸種の阿弥陀釈を集めた『釈門秘論』第五の第一帖所掲の目録によつて第二帖にあつたことが知られる、「同(阿弥陀) 如来因行果徳釈」にほかならないと思われる。またこれが『転法輪抄目録』の第八箱の阿弥陀の部に、「一帖徳略尺 阿弥陀 上西門院喪家人詠」と見える「因果功徳」の釈とも同じであらうことも既に述べた。なお本編には題下に「上西門院／御葬家依人詠注澄憲」という注記を伴っているが、金沢文庫本にも同様の付注があるらしいことが櫛田氏の文から推察される。文治五年七月に没した上西門院の追善法要のために草された釈である。

【25 弥勒尺】先にも触れたように、金沢文庫本『弥勒尺』は本編と基本的に同文の資料である。当該本は鎌倉末期頃の写本と目されるが、扉左肩に「弥勒尺」の題記があるのは本文のみで、作者名や奥書等は見られない。虫損のため欠けた文字がやや多く、しばらく比較可能な部分について、主な異同を前の要領に做つて掲出する。

- ② 于一云 ③ 見之―見者 ④ 者―昔 宮―苦 初導心―初發道心 ⑤ 名号―名字 見身―見其身 心得―必得
 ⑧ 苦行―共行 ⑨ 身心―自身 已熟―之熟 ⑩ 已熟―之熟 滅劫―滅劫[?] ⑪ 前成仏候弥勒於第十滅劫人壽八百万
 歳時―(なし) 当―当(抹消) ⑭ 都率来下―自都率天来下 ⑮ 誘機於四悉―誘機縁於悉旦 九十六億人得益第
 二会中九十四億人開悟第三会之時九十二億人得脱ス―□□□億人得解脱 ⑰ 三会令論―□□^{三厭}合論 女―廿 然―
 然此 ⑱ 慈悲願―悲願 ⑲ 接―引接 ⑳ 遺誠―遺跡 是―(なし) 遺心―遺心 二―一 ㉑ 一斤―一行 其吹―
 爰某 化道―化導 ㉒ 睡―暗 大夜未暁―未暁 ㉓ 妄想雲原戒珠掩光―妄想塵厚掩戒珠光 吁悔―後悔 ㉔ 徒不
 起―不徒起 ㉕ 孤不熟―不孤熟 仏熟―仏熟蠅蟻□□^ツ灑雨於北林 ㉖ 雖多―抑我等衆生惡業雖多 非无搏一聞

功—非一搏—一聞之功 ①依是—伏乞 窶无—窶毛 期遥期—遥期 ②近—進 遠—退 菌林—菌 ③採—拾 ④
暁有何疑矣—德何抱

いづれかと言えば書写年代の下がる本編に細かい誤りが多く、末尾近くでまとまった脱落も二例あるが、『弥勒尺』
にも途中二箇所にやや大きな脱文があり、むしろ相互に補正し得る資料と評価すべきであろう。

【38勢至・39勢至尺・40勢至尺】三編の勢至釈が並んでいるが、この内40は、「相好光明功德、智慧神通利生、皆観音
ト等シテ許モ无異事。仍別ニ非可奉尺候」とあって、観音釈の存在を前提に述べられていることが明らかである。39に
「勢至菩薩ハ観音ノ功德ヲ申ニ、顕御心。…功德智慧慈悲本誓、与観音秋毫无乘(乖カ)」とあるのも、同じように解
釈できよう。勢至菩薩は独尊として供養されることは稀であり、三編がいずれも観音や弥陀如来と対比し関係付け
つ釈していることから、これらは本来阿弥陀三尊釈の一部と想像される。そして内容から見て、40は33又観音尺と
もと一具だったように思われる。

【47不動尊尺】『釈門秘鑰』第十三の第三帖には四編の不動明王釈を収めるが、本編はその最初のもの(標題「不動明
王釈」。第十三の第一帖所掲の目録も同じ)と一致する。これについても、主要な詞章の異同を掲げておく。

- ①儼伽—瑜伽 本尊—最尊 ③本尊—本 然不—然而 催—依 ④依—催 一子—大 ⑥載—戴 閣—解 ⑦幪
—幪幪 ⑧契上契下—喫上嚙下 ⑨思—息 ⑩雄—確 ⑪□—撰 奇—崎(時カ) ⑫迦楼羅—迦楼 搥逆—拒
逆 ⑬一時—一持 ⑭相之—相 ⑮怨怒之—大士—忿怒之—大王 靡旗—旗靡 ⑯随逐—随逐 ⑰載—戴 童子—又
⑱恭—忝 ⑳无動為本尊—無動一德故四大八大忿怒以明王為眞首瑜伽瑜祇行人以無動為本尊 ㉑帰—馮 ㉒顯—
(なし) 四智四行—四智行 ㉓大五—五大 ㉔金剛—外金剛 不持念—誰不持念 畢—乎 ㉕奉仕修行者—
(以下なし)

一箇所大きな脱文があるのを初め、これも本編の誤りの正される方が多いが、時には逆の例もある。末尾の部分は、やはり後人の追加であろう。